
明治三十一年六月二十四發兌
女鑑
第百五十九號
東京國光社

女鑑第百五拾九號

目錄

矢部さま子



親の心

人の親の心はやみにあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな。とは、千古の名言なり。焼野のきゞす、夜の鶴、生きとし生けるもの、誰か子を愛せざるべき。子を愛するは、自然の人情なり。唯愛に溺るゝに至りては、子をあやまり、身をあやまり、又家をあやまる。我が子のすぐれたるを褒められて、鳶の生んだ鷹と云はれても、喜びこそすれ、つゆ怒ることなし。たゞ子が可愛さに、子だに鷹とほめらるれば、我が身は鳶とれとしめられて、毫も厭はざるなり。同じく親なれども、とりわけて、子の愛に溺れ易きは、女親なり。女子は元來やさしかるべきものなれば、子に對しても、嚴格に過ぐるは、決して望ましからず。されど、甘い一方にては、子を教育すること能はざるべし。寒しとては、絹物をかさねしめ、物がほしゝとては、常に美菓に飽かしめ、而して爲に皮膚を弱くし、胃を弱くす

るを知らず。唯荒らき風にあてじとばかり、いたはりて、竟に後日世に出でゝ、はげしき競爭場裡の艱難に堪ふること能はざらしむ。嗚呼これ誰の罪ぞや。可愛き子には、旅せしめよと、古人は云はずや。むかしの旅には、汽車汽船の便なく、苦しきものなれば、子をして旅にて困難を知らしめよ、かくて困難に堪ふるを得せしめよとの意なり。旅はまた、あかの他人に接することなれば、親の如く甘からず、隨て克巳忍耐の心を養ふを得るなり。又小兒には、二分の飢と寒とを帶はしめよ。といふ古人の言を味ふべし。逸樂は鴆毒にひとし、暖衣飽食は人を惰弱にす、彼の柔弱にして女々しく、活潑有爲の氣象に乏しく、艱難に逢へば、忽ち萎縮する人は、大抵甘過ぎる親のもとに養はれたるものなり。古來英雄豪傑は、富貴の家に出づること少くして、富めるよりは寧ろ貧しき家より多く出でたるを見れば、思ひ半ばに過ぐるものあるべし。富貴の人の子、必ずしも生れて愚なるに非ず。富貴ならざる人の子、必ずしも生れて賢なるに非ず。たゞ養育の如何によりて、賢愚の差を生ずるのみ。貧賤も其の度を過して、九尺二間のうらだなに住

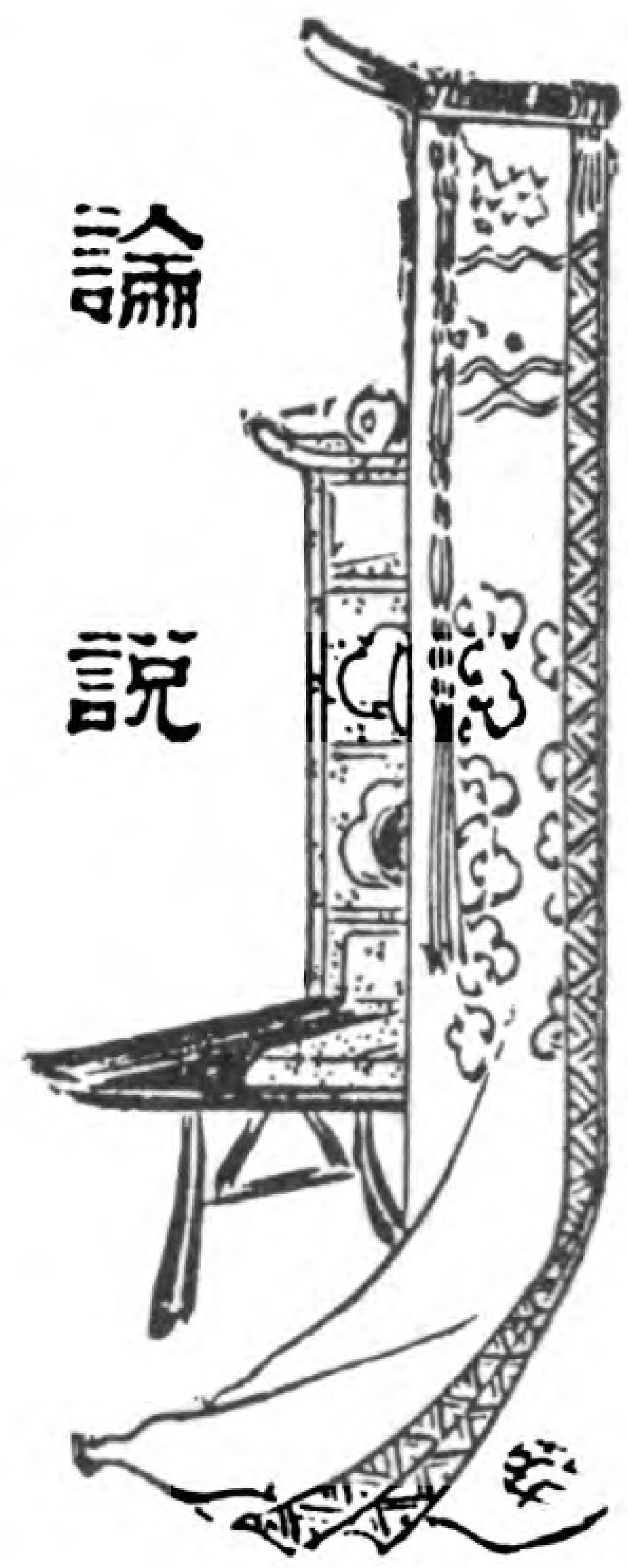
むに至りては、如何ともし難けれども、さまでは貧賤ならず、又餘裕もなき位の家にありて、母たるもの、子に甘からんとするも、力及ばず、漸く工夫して勉學の資は供するも、飽食暖衣せしむる能はず、知らず／＼二分の寒と飢とを帶ばしむる古訓にも合し、愛する子を旅せしむる教にもかなひ、艱難よく其の子を玉成す。これ英雄賢人の多く草莽に崛起する所以なり。富貴の家にても、この用意だにあらば、また貧賤の家と異ることなく、よく賢人を出すを得べし。

子女を養育するには、實に上に述べたる如き覺悟なかるべからず。茲に今一つ女の子に就て言はむに、女子は皆他の家に嫁するものなるが、夫一人の家は少くして、舅姑あるべく、小姑もあるべし。其の間にありて、よく圓滑に處理せんには、幾多の不平を忍び、幾多の困難をこらへざるべからず。即ち克已忍耐の心に富まざるべからず。而して、これ、甘に過ぐる親のもとに生ひたちたるものゝ能くする所に非ず。貧賤の家に長じて、艱難を嘗めたるものは、必ずよく舅姑に事ふるものぞかし。男子にとりても、女子にとりても、親たるもの、愛に溺れて、し

つけを忽にするは、反て其の身の不幸なり。此の如きは、眞に子を愛する所以に非ず。

子故の闇にまよひ、愚痴に陷るは、いと見苦しきものなり。子の居る處にて、人に向ひて、其の子の自慢するは、啻に見苦しきのみならず、其の子の爲にも宜しからず。殊に、年老いては、愚痴になり、其の子の世に評判よきをうれしがるの餘、逢ふ人毎に、其の子の自慢話しをするもの、世に少なからず。此の如きは、心も見ゐすきて、聞苦しく、貴女の品位をおとすものなり。人の母たるもの丶注意すべきことにこそ。

位山あとをたつねて　　　土御門内大臣通親
のほれとも
子を思ふみちに



論説

婦人と勞働

河本淡山

我が將來の國勢に於いて、最も憂ふべき問題は、政治、宗教、教育、實業等、枚擧に遑あらずと雖、中に就きて、余の常に憂ふる所は、近來の新現象とも云ふべき、社會問題てふ歐米思想の、我が一般實業社會に波及せんとする潮流の、うたゝ急激なることの一事是なり。而して、此の潮流の、我が婦人社界に及ばんとしつゝあるは、決して雲烟過眼に附すべきことにあらざるなり。社會問題の研究は、實業膨脹の今日に當りては、大に奬勵すべきことなり。而かも、事の極端に走りて、遂に其好果を納むる能はず、反て社會に一種の害毒を流すが如きことあるは、歷史上往々見る處の事實なり。

歐米社會學者の唱ふる『勞働は神聖なり』との語を取りて、直ちに、國土、人情、習慣を異にせる我が國に適用せんとする結果の如何は、識者の大に研究すべき問題なり。

近時工業界に、同盟罷工なるもの續々起り、終に妙齡なる婦女の、團結して雇主に反抗するが如きことあるは、邦家前途のため杞憂すべきことゝ云ふべきなり。之れをしも婦人の地位進歩せりとて煽動するが如きは、大にその研究の道を誤るものと云ふべし。固より、婦人の地位を進むるは、社會發達進歩の上に於て、最も望ましき事なり。唯其の道を得て、我が國狀、習慣、人情、等を參酌し、以て格好の地位に進ましむべきなり。若し徒らに急激なる進歩を望み、理想を歐米の婦人に取り、婦人に冠するに『革命の花』『自由の天使』等の空想に驅かれ、古來養ひ來りし温和柔順なる婦人を導かんとするは、恰かも日本婦人界に、一の破裂彈を投せんとするが如し。其の害毒豈懼れざる可けんや。

且夫れ實業界の膨脹するに從ひ、婦女を驅りて勞働界に從事せしむること、日一日より增加しつゝあり。而して、一方には、社會問題とて、傭者被傭者の間に、一種の惡感情湧起し、種々なる事實となりて顯はれんとするの兆あり。如何に生存競爭の激烈なる時勢とは云へ、妙齡可憐の巾幗者流をして、將た温良淑德なる日本婦人をして、此の渦中に投せしむるは、豈亦寒心の至りならずや、今左に、婦女を使用する最多き全國紡績場の職工の調査を示さむ、

年次	男工	女工	合計
明治十九年	七〇六	一、一七一	一、八七七
明治二十年	九三〇	一、四〇〇	二、三三〇
明治二十一年	一、二〇四	二、一九九	三、四〇三
明治二十二年	二、五三九	五、三九一	七、九三〇
明治二十三年	四、〇八九	一〇、三三〇	一四、四一九
明治二十四年	五、〇五一	一四、二一六	一九、二六七
明治二十五年	六、三五四	一八、八七八	二五、二三二
明治二十六年	六、一六四	一九、二八四	二五、四四八
明治二十七年	八、一二九	二六、九二四	三五、〇五三
明治二十八年	九、四六七	三〇、四四六	三九、九一三
明治二十九年	一〇、七〇九	三三、九八三	四四、六九二
明治三十年	一二、九六八	四三、一四七	五六、一四五

右は單に紡績場に使用する婦女にして、其數四萬余人に及べり。此他、全國幾千の工場に使用するものを総計せば、數十萬の多きに登らん。今や時勢は滔々として、金是れ拝するの時、物質的文明は、婦人其のものゝ品格を顧みるに遑まあらず年々歳々婦女を驅りて、ます〳〵多くの勞働界に投ずるの悲惨なるを思はゞ、誰れか同情の涙に咽ばざらんや。噫苟くも世の識者を以て自から任ずる者『婦人と勞働』なる問題に付

きては、實に、丹心を注ぎて研究すべき時にあらずや。（未完）

女德のしをり（八）

三輪田眞佐子

第二誠意　中庸に、誠者天之道也誠之者人之道也。とあり、されば、我が意を誠にすることは、いと尊き德ながら、實際これを修むることの容易ならざるぞ遺憾なる。如何となれば、人は身外の物を見、あるは聞きて警戒するは難からざれども、耳目は我が心を知るに由なきを以て、動もすれば心の作用より生ずる意の正邪を辨ふる能はざる傾きあればなり。

さればにや、昔より貞婦孝女の例は少からざりけんも、誠意の德ありし女子の例は殆ど聞かざるなり。蓋し誠意は、その人自らにあらざれば知ること難し。從ひて、他人に知れざるも理なりとはいへ、苟も、内に盛德積らば、おのづから外に餘光の發せざるはなからん。されば、その例なきは、必竟誠意を工夫することの容易ならざるためならん。

讀者の能く知るらむ瀧鶴臺の内君は、つねに赤白の二個の毬を作り、そを袖中に入れけるが、若し惡念起るときは、忽ちその赤絲を結び、善念起るときは、直にその白絲を

結び、以て良心を警戒したりしとかや。おもふに、人は鏡によらざれば、その面の醜美を知り易からざるが如く、一種の工夫によらざれば、誠意の徳を養ふことも難からん。

大學に曰く所謂誠其意者毋自欺也。と、されば、一言一擧につき、必ずその良心に訴へ、露ばかりたりとも内に疚しき所あらば、自ら欺くものなるを以て、そを述べ、且つ行ふべからず。然るに、人はこればかりの惡は犯すも可ならん、僅に一度なれば犯すも可ならん、あるは、知る人もなければ犯すも可ならん等、種々の口實を求めて、良心を欺くものの多きが如し。あはれ、野に咲く菫の花を見よ。そがゆかりの色、そがゆかしき香は、決して自ら欺くことをなさゞるなり。諸孃心して、おのづからなる女性の誠徳な失ひそ。うしなはゞ菫にも耻づる理にこそ。

第三節義　節義を全うするためには、死も恐るべきにあらず。若し節義に背かんか、生も望むべからず。實に人は、かゝる心ありてこそ、いや貴く、いや恃もしけれ。近來物質上の進歩につれて、私利を知りて公義を思はず、兄弟も私利のために相爭ひ、朋友も私利を以て相集まり、反りて輕薄者流をば、時運を知るものとして譽め、遂に滔々として天下の風潮をなすに至りぬ。

むかし、秦の魏を攻め、その諸公子を誅しけるが、なほ一公子を得ざりけるより、國中に令しけらく、その公子を得るものには千金を賜ふべし、これを匿すものは三族を滅さん。と。然るにその乳母は、公子を負ひて逃れけるが、或人曰ひけらく、今や國は破れ、族は亡びぬ、誰がために公子を護る、且つ千金は重利なり、三族の刑は嚴なり、宜しく圖るべし。と、乳母答へけらく、利を見て上に反くものは逆なり、死を畏れて義を棄つるものは亂なり、われは利を求めて逆亂をなすに忍びず、亦人のため子を養ふものは、これを生さんためなり、などか殺して以て節義を廢すべき。と言ひて共に澤中に逃れけるを、秦軍爭ひてこれを射けるが、あはれ乳母は身を以て公子を蔽ひながら、同しく死にけるとかや。將に女子たるものはかくあらまほしうなん。

おのれは、當今の世に於て、女子教育の開け行くまに〳〵、智識才藝の著しく進歩するを歡ぶとはいへ、節義の心は漸々と衰ふるを哀まざるを得ず。

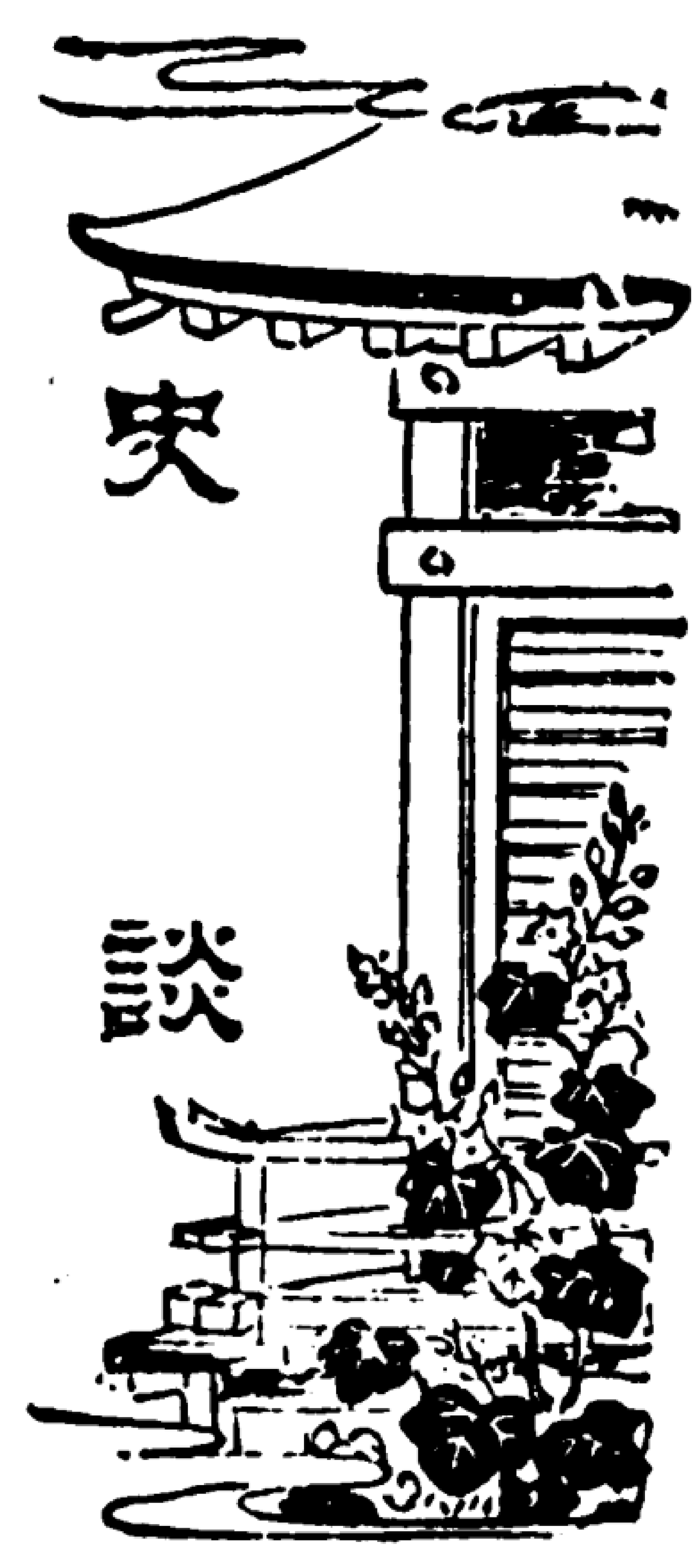
第四　慈悲　甘露降りて草木の繁茂するが如く、世は慈悲の徳に由りてこそ、老いたるも、若きも、強きも、弱きも、共に榮えて樂しけれ。わきて女子は、人類平安の源なれど、女子の眼より落つる慈悲の涙は、猛き丈夫の怒をも和らげ、憂をかこつ輩をも慰むに足らん。

おのれの慈にいふ慈悲は、孟子の、惻隱の心は仁の端と述べけるものに近し。佛者も、慈悲は一切の衆生を愛念する心なり。と說きけり。和氣淸麿公の姉廣蟲が、當時亂を起し斬刑に當るべきもの多きを聞き、死刑は酷なり、流刑にこそ。と、朝廷に奏せしことありき。亦時に五穀實らす、惡疫行はれしかど、賤民は兒を養ふに堪へずして、路傍に棄つるもの多かりけるが、廣蟲いたく惻隱の心を起し、棄られける兒八十人あまりを拾ひて撫育しけるとかや。これ、佛敎の慈悲に適ふのみならず、純正なる女德にも合ふものなり。

蓋し、おのれは、外形に顯はるゝ慈善事業などのみを以て、慈悲のこと終るとは言はず、獨り內部に物の憐を知り、これに同情を注ぎける、なつかしき慕はしき心こそ、慈悲の本体とおもふなれ。されど、慈悲ある女子に近かんが、病者も痛を忘れ、貧人も樂を覺ゆるなるべし。あはれ、人性妙味の德は、女子の慈悲なる哉。

皇后陛下御製

綾錦とりかさねても思ふかな
寒さおほはん袖もなき身を



矢部まさ子

盬井ふく子

あはれ行路の難、山にあらず、水にあらず、只人情反覆の間にありと、うべなるかな。

正子、姓は矢部氏にて、はじめの名は、久子と呼びて、美濃國芝原郷北方に生ひ立ち、二八の春、はやくも同じ國、結の里なる大平氏に結び、ひとりの女を設け、たゞ世をやす川のやすき流れに住みて、卯の花のうき浪も知らず、三年をつみける十九といふ年、夫は花ぞめのいつしか他所なる色香に心うつろひ、あはれ夫がため衣裳に薫する蘭麝も、夫は又馨香と聞がず、結髪、未だ五載ならずして、はやも瘡を生じぬる人心こそあさましけれ。

正子、はじめはたゞ容飾を盛にし、金翠を着、夫をしてもとの心に引きかへさむものと、偏に願ひたれど、移ろひはてし人心、遂にまた毛羽を生せず。はては全く忘られしに、是非もなく／＼女を伴ひて、母の親の許に歸り、後再び嫁がず、孤雁たゞ孤閨

を守る女情こそ、中々に世にたのもしけれ。後、母兄とともに京に移り住み、歌よみ、手かく業を蘆庵小澤氏に學び、其外茶香の風流をはじめ、女禮長刀の態まで多く學びけるが、一年、ふと故郷に下りたるに、もとの夫、後の妻もあり、子ももののしたるに、野中の清水、もとの心忘れがたくやありけむ。後の妻をも去り、子をも移さんに、再び歸らんやう仲だちして、とかく云ひなびけむとし、文をさへ送りしかど、戀鏡の中顔色あらたまらぬむかしすら、なほ瘡を生せられし身、今更にあはむも耻かしく、後の妻が心もかなしとて、文さへ開かず、

　秋にあひて枯れにしものを今更に何れどろかす萩の上風

と云ふ一首の歌さへそへて返しけるに、夫もまた誘ふ道なく、そのまゝに止みて、後の妻をも止めたり、あはれ恨みある人に恩もて報いぬる正子の心ぞ、いさぎよくもまた奇特なる。

伴ひし女も、やう〳〵長ずるに從ひ、愛らしさも一入、如何にもして、女ばかりは、我が如き拙き世を送らせじものと、たゞ子が成人するをのみ樂しむものから、願くば已れ宮仕へして、やがてはよきにしをも求めむものとて、二十六と云ふ歳いとしの女を母にたくし、其の身は何某の國守の姫君のかしづきに參り、名をくれとたまひ、江

戸に仕へけるが、才あるからにたぐひなく時めかし給ひしに、世はさま〳〵の人情、又や女伴れの妬にあひ、やう〳〵一年ばかりにて、退きけるが、あひ知る人のすゝめにより、なは江戸にありて、しきしまの道を敎へけるに學ぶ人百に及びけるが、一夕火災にあひて、此處彼處ににげまどひ、辛うじて身ひとつを全くして、京に歸りけるに、悲しや母にあづけおきたる女、先に死し、次ぎて母も身まかりけるとき、歸りつきたり。

あはれ、たゞ世のなぐさとも、杖柱ともなりたる母子に、一時に別れたる悲しみ、悲しと云ふもうきといふも、云はゞなべて、ならぬ言の葉も知らずかし。たゞ正子がなべてならぬ涙を汲みたまひてや。

うき世のうき、やらむかたなく遂に世を背き、尼となりて、惠靜と名づけぬ。時に年二十八歲、人皆惜しみて止めしかど、天災、人災、災のかずをつくしたるこし方もただ子に迷ひ、母に引れたればこそ、世をも凌ぎ、命をも玉の緒と惜しみにたる、世のなぐさみのみなる母子に去られて、誰れ故あぢきなき世に住まん、遂に人々が、止むる袂をたち、

淺からずいさむる事にそむかめや大方に世をうしと思へむ

と口ずさみて、遂に世をそむきはてぬ。

その折り伴蒿蹊といふ學者、日來知れる中、此の事をきゝ、いと悲しみて、云ひやりける歌、

乾くまも涙に袖の朽ちはてゝ衣かへぬと聞くは誠か

思ふにも違ひのみゆく世のうさや眞の道のしるべなりけん

正子返し

すみそめに衣の色はかへしかとかはらぬものは袖の上の露

思ふ事げに違はすは世の中のわたなる道に迷ひはてまし

げにすみぞめの袖のつゆ、まだ乾かずして、あくる年の秋長月母子のあとをしたひて、死手の山へとたび立ちぬ。その歌數ある中に

雁をよめる

なく雁の聲もはるかにへだたりて翅きぬゆく秋ぎりのそら

衣によする戀

れもふ事の人にはきせじ月草の花ずり衣うつろふがうき

題しらず

水ぞこに沈める月の入りはても何をうき身のたぐひにはせん

瀬によせて思をのぶ

世の中はあすかの川ときゝしかど身のうきせこそかはらざりけれ

げに歌にも、うき瀬のほど思ひくまれけり。なほいみじき歌かぞへつくすべうもあらず。あはれ才ある女の中々に幸なきは、大和にももろこしにもためし多き事ながら、かばかりの才女、うき世のうきあらしに仇に散りぬるがいとをしさにかくなん。

久米と曾與　　山本正周

尾張の國、海東郡、八屋村の某に、二女あり。姉を久米といひ、妹を曾與といふ。二女ともに性質純孝なり。家もとより貧しきが上に、父は久しく病に惱みけれど、日々の糊口も、心のまゝならず、藥餌を買ひ調ふべき術もなし。二女かくてあるべきにあらねど、互に、談合して、或る富家の婢となり、その給銀にて、父を養へり。さて、自らは、常に、垢つきたる襤褸をまとひて、身をもをしまず働きけれども、定めある給銀なれど、之を支ふるに足らず。且、離れ住みては、其の安否も心にかゝりて、安からねど、遂に、暇を請ひて、家に歸り、その後は、毎日邑里を經廻りて、食を乞ひ、

之をもて、父を養へり。さて或る日、名古屋の町に出て、覺鳳寺といへる寺の門に來りし時、妹は、かねて疫病にかゝりしに、今、頓に、熱氣頻りに發し、口渴し、呼吸苦しく、絶え入るさかりなりしかど、姉は、之を見て、甕中を探り、僅に、二錢を得て、これをもて、西瓜を買ひて、與へんとせしに、妹は、苦しき息の中より、われは、水にて足れり。錢は、何なりとも、物買ひて、父に供したまへといひ畢りて、事絶えたり。此の時、姉は、十九にして、妹は、十六なりしといふ。身は、卑賤に沈みても、親を思ふ情、厚くして、死に至るまで、之を忘れざりしは、實に奇特の婦女子なり。

紀伊女　　仝

播磨の國、宍粟郡、三方町の某が女紀伊といへるがあり。幼にして母を亡ひ、父の手にて、育てられけるが、稍、長ずるに及びて、この父病にかゝりて、家業を務むる事能はず、貯とてもなければ、糊口の道に、はたと窮しけり。紀伊は、已に十七八歳にてありければ、日夜、女の手一つにて、父を養へり。時に人ありて、かくてあらんよりは御身を人に委ね、その助によりて、心安く父の病を癒やしたまふこそ善けれ、と勸めしに、紀伊は、いなみて、いはく、凡そ、婦女たる者、一旦身を人に委ねなば、すでに吾が身にあらぬものを、何とて専一に父を養ひ得べきといひて、其の言に從はず

不自由ながらも、父子二人にて、世を送り、その看護と、己が手業に、餘念なかりき。されど、此の事、つひに、國主池田侯に聞えければ、年ごとに、穀を賜ひて、賞せられしといふ。



家政

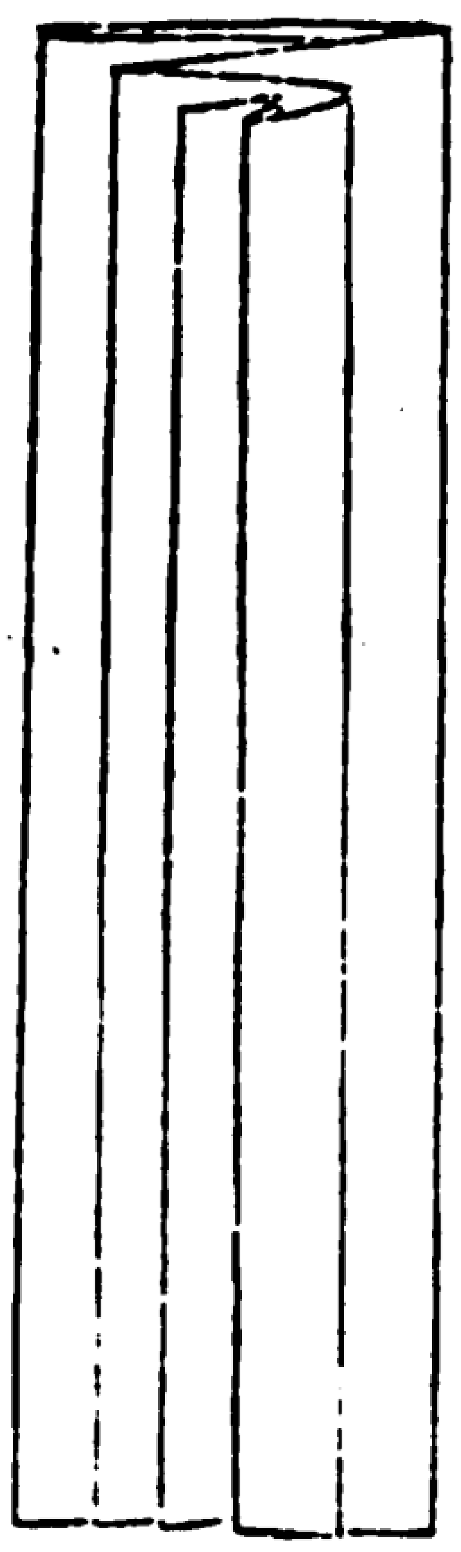
折形

有住齊

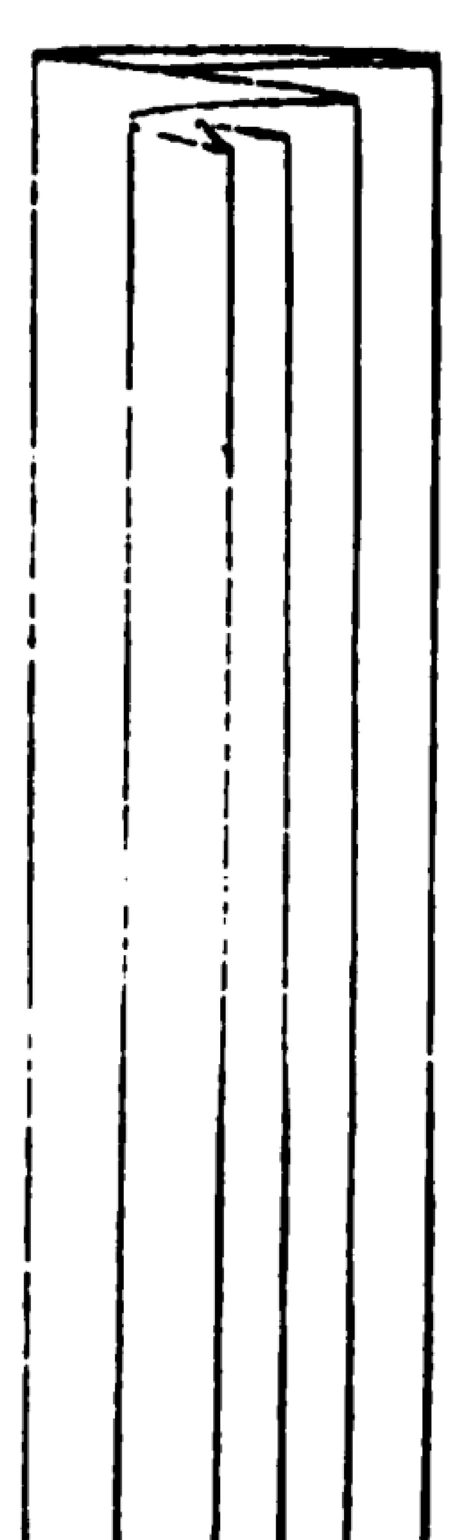
笄刀篦刀柄包

笄刀の柄は、此の折形の如く包みて、白紅にて、男結女結にて二所結ぶなり。篦刀の柄は、惣銀水引にて、是も二所結ぶなり。何れも二本宛にて結ぶ也。

左

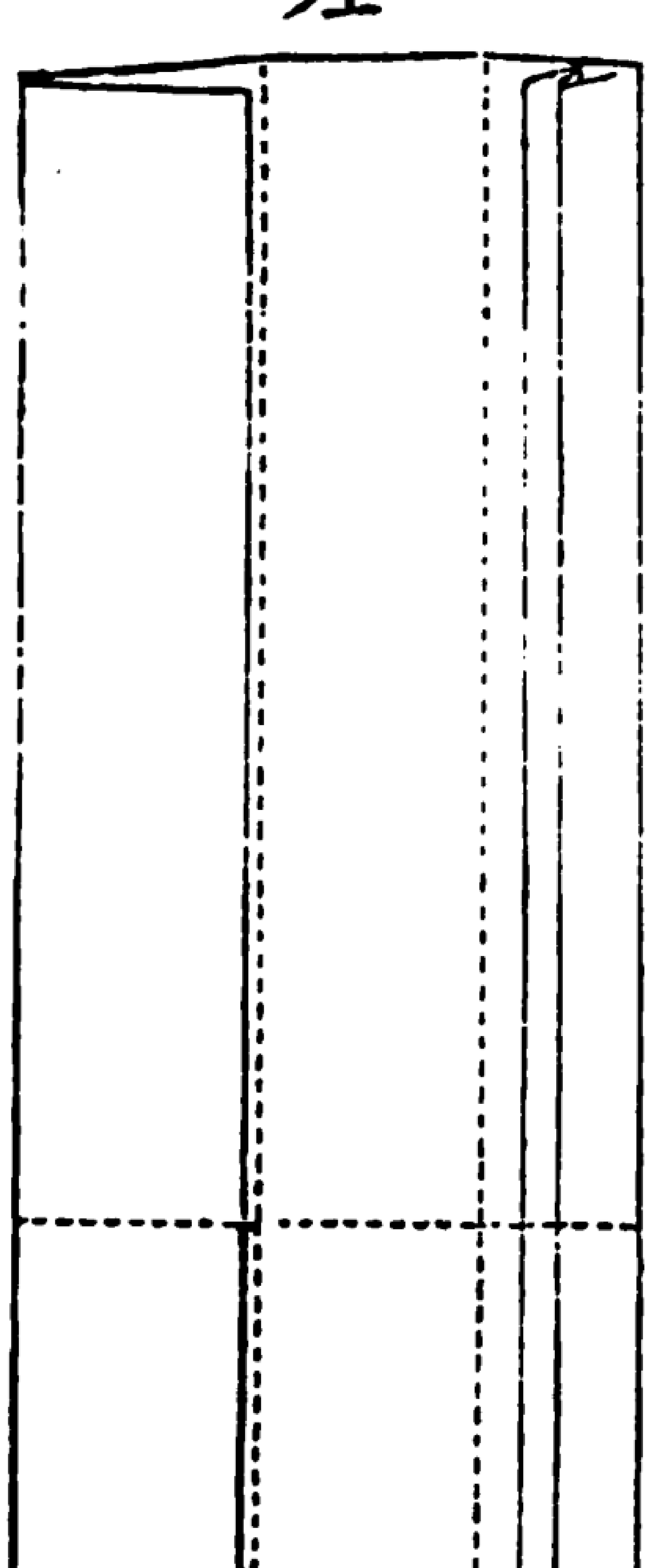


右

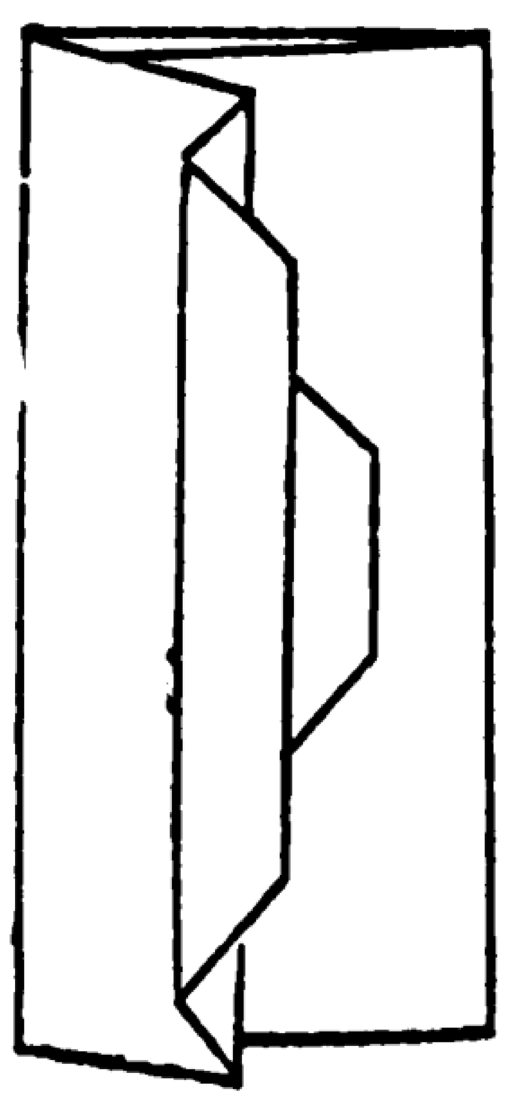


おなじく解の圖

左



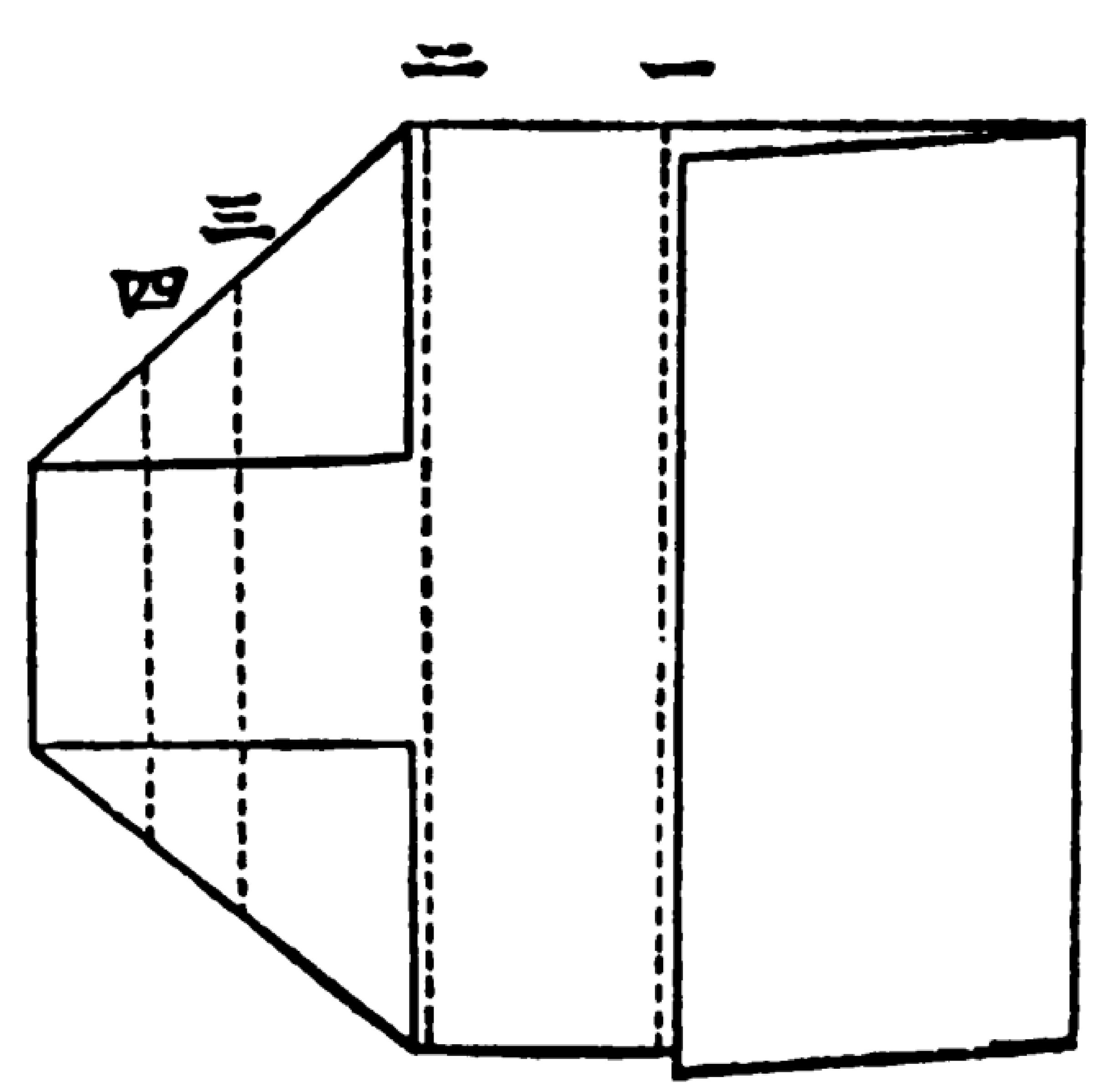
先づ此の圖の如く折りて、縱の點線の左の方なるを、其線に從ひて、內部に、右より左に向けて折り、后右の方の點線の處を左より右に向けて折り反し、后横の點線に從ひて、下部を裏に折り反して折り上るなり。又右の方は右より同じ仕方に折れぞよし。されど、左右とも、同じ樣に折りて、さて、何れか一方を、轉倒して、下を折り反せぞ、左右を得る理なり。



足袋上草履包

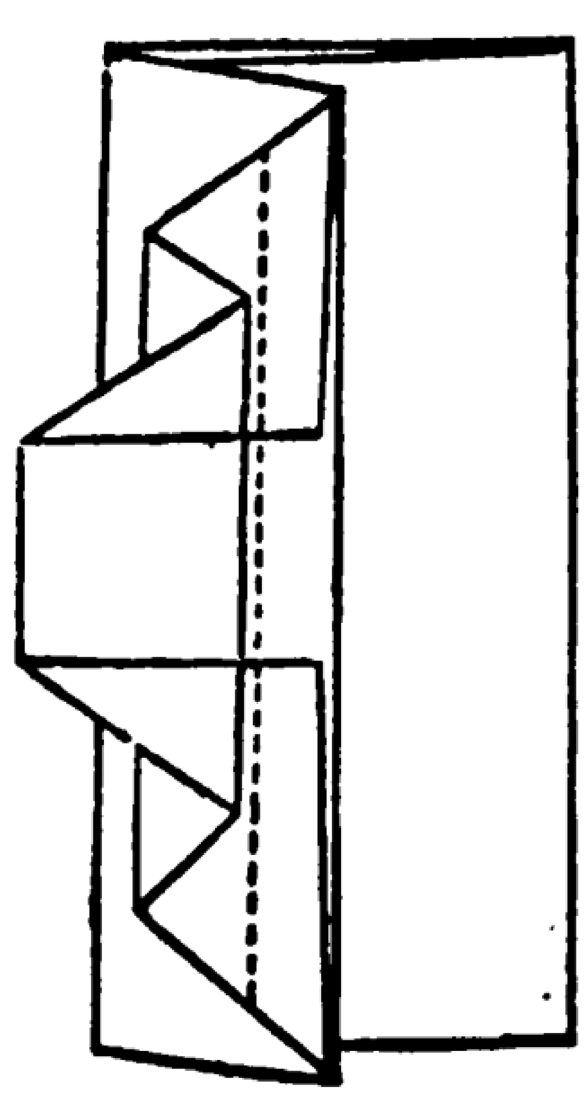
是は爪先を字頭の方へして折形の如く包むなり。

れなじく解の一



先づ斯樣に折りて后、其最も右にある(一)の點線の處を右に向けて折り、次に(二)の點線の處を左に折り、次に(三)の點線を復右に折り、次に(四)の點線を左に折り反せぞ解の(二)となるべし。

れなじく解の二



此の點線にて示せる處を右に折るべし。之にて折り上る。

茶の湯

茶禮初學

孤峯菴碌仙齋不羨
關　葦　雄

目錄

目錄終

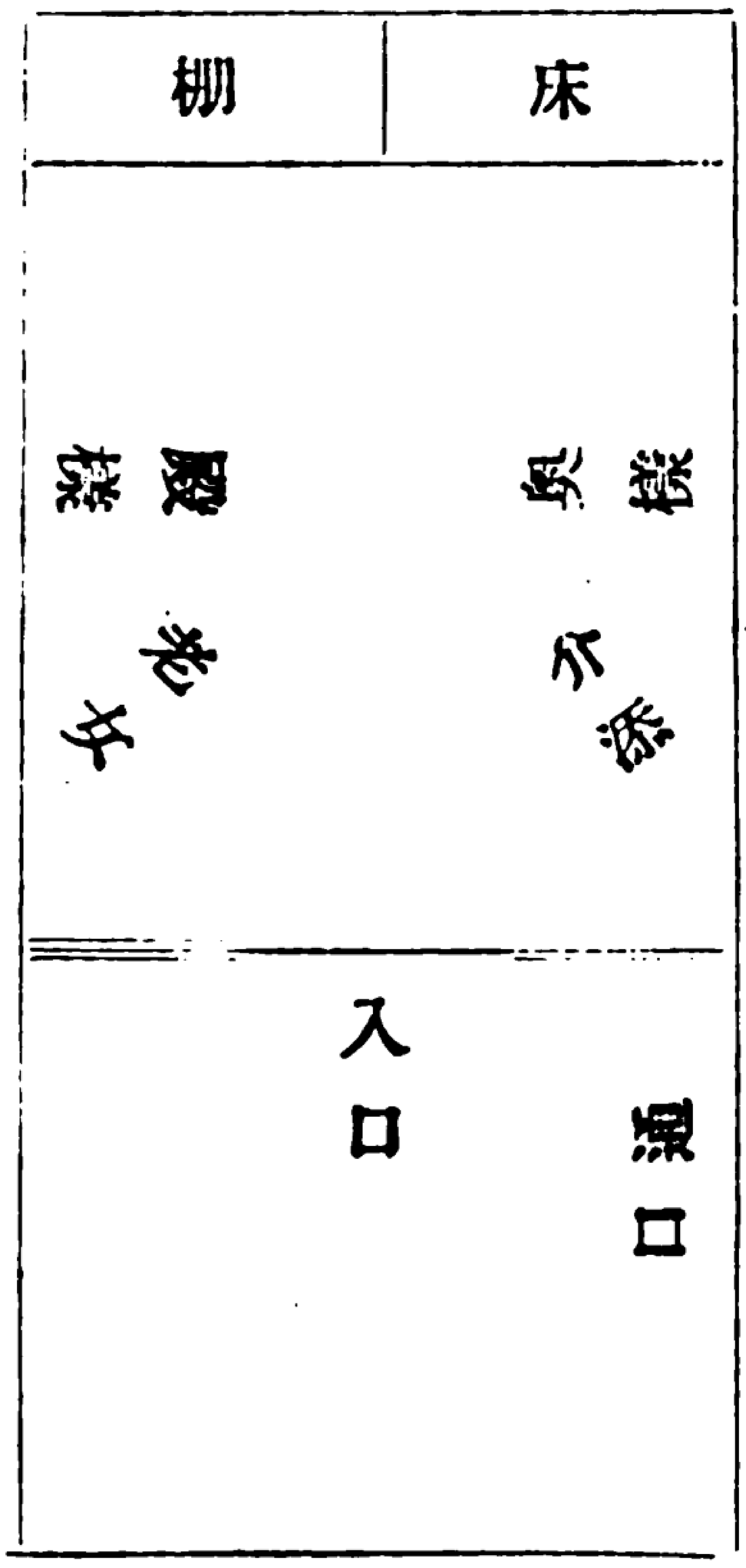
（以下次號）

婚禮之樣（第三）

有住常子門人　みを子

御色直御式

一 御二方樣　始の如く御着座
一 御熨斗鮑　三方　差上之
一 御緣女樣御介添起座　御中央へ差上之、末座へ退き平伏の事
一 御二方樣御會釋の事
御熨斗　三方　引之



一 御色餅（累之）
一 御雜煮　差上之　引之
一 御本膳　差上之
一 御二膳　差上之
一 御三膳　差上之
一 御向詰　差上之
一 御鉢　差上之
一 御鉢　引之
一 御向詰　引之
一 御押臺　差上之
一 御滴土器　差上之
一 御島臺　差上之
一 長柄銚子
御加へ提子
一 殿樣へ　御二献　差上　其土器持參

奥様へ　御一献　差上　御加への事

殿様より御肴御老女御名代にて奥様へ被進候事

加へて参り

奥様へ　御二献　差上　其土器持参

一殿様へ　御一献　差上　御加への事

奥様より御肴御介添御名代にて奥様へ被進候事

加へて参り

殿様へ　御二献　納候事

一御本酌、御加へ大結の義有之　御勝手へ入候事

一御滴土器　引之

一御押　引之

一御三膳　引之

一御二膳　引之

一御本膳　引之

一御老女、御介添起座、下座に附て恭悦申上げ、相互に千秋萬歳奉祝て御披き申上候事

一殿様より御立被成候事　前同断

（御膳部の様）

御長伸鮑　三方

柳御箸　小奉書紙　白赤水引　御包

御雑煮　白味噌仕立　鯛の子眞蒸　色紙餅　亀甲大根　小松菜　鶉の子芋　花かつを

（御本膳）

御生盛　二盃酢　平目魚　紅くらげ　白髪大根　水仙寺のり　防風

御汁　三州味噌　摘入蒲鉾　糸美津菜

御香物　葉つき大根　みそ漬なす　花しほ

御坪皿　海鼠子　大納言

御飯

（御二）

御千代口　赤貝　水引獨活　花菜　あます

御汁　篠さより　松露

御平皿（ひら）　牡丹鰕　小かぶ　しめぢ茸　木の芽

（御　三）

御差味　鯛平作　金絲瓜　新たで　わさび

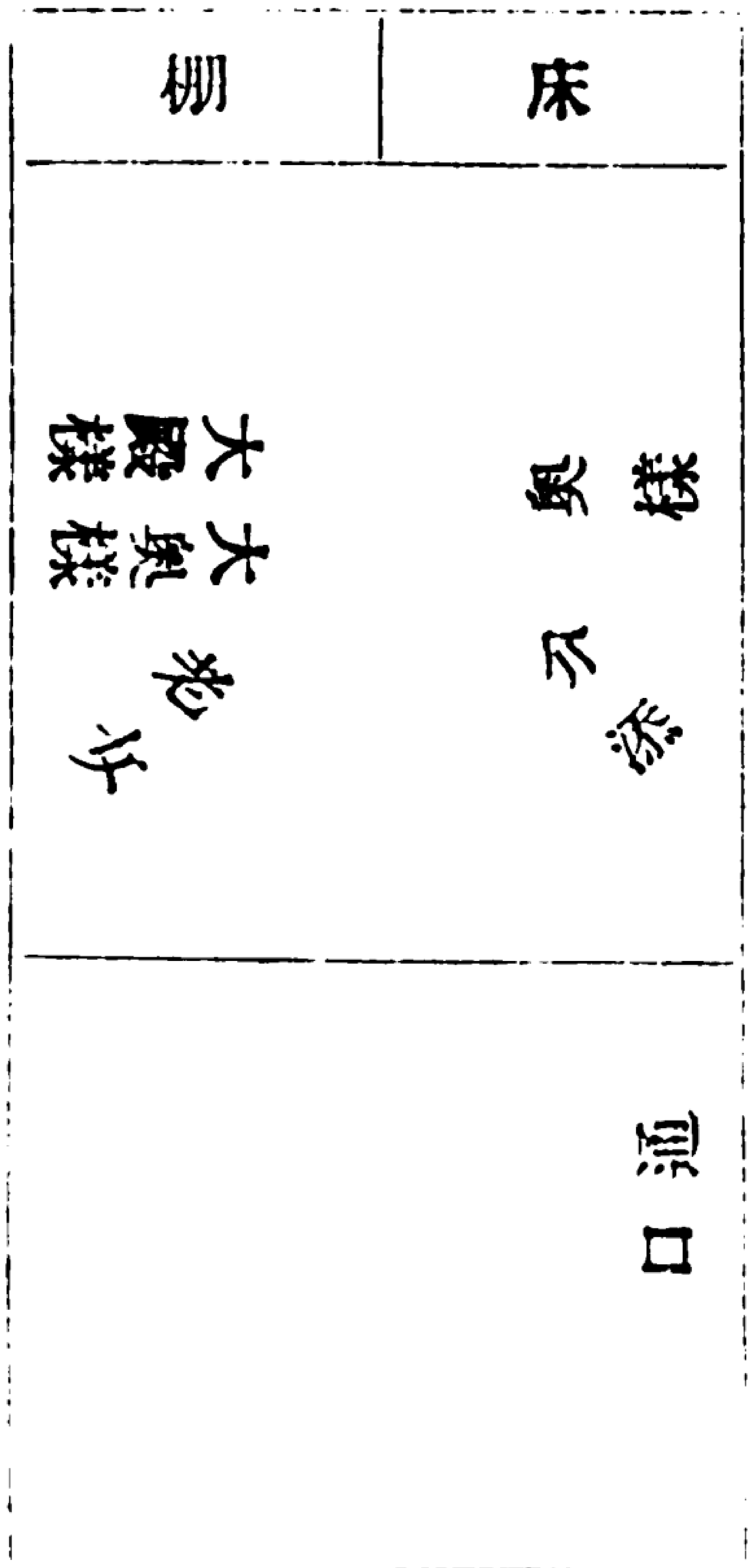
御汁　おぼろ鯛　順斎

御向詰　鯛鹽焼

以　上

この膳部の様はあらましを記しとゞめたるなれど、其書法も正しからずなん。

御親子様御盃式



一御双方様　御祝の間へ御着座

一御長熨斗鮑　差上之　末座にて平伏

御双方様御會釋有之候事、前同斷

御熨斗鮑　引之

一御雜煮　（略之）

一御濟土器　差上之

一御盃　差上之

一御押　差上之

一御本酌御加へ　入座

一御聟様へ

御二献　差上　共土器持參

一御奥様へ

御一献　差上　御加への事

御聟様より御肴御老女御名代にて御奥様へ被進加へ

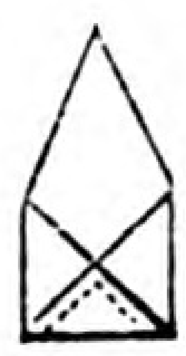
參りて御二献　差上　共土器持參

一御舅様へ
御一献　差上　御加への事
御奥様より御肴御介添御名代にて御舅様へ被進　加へ
参りて御二献　差上候事
一御姑様へ
御二献　差上　其土器持参
一御奥様へ
御一献　差上　御加への事
御姑様より御肴御老女御名代にて御奥様へ被進、加へ
参りて御二献　差上　其土器持参
一御姑様へ
御一献　差上　御加への事
御奥様より御肴御介添御名代にて御姑様へ被進加へ
参りて御二献　差上　御納に相成候事
一御本酌　御加へ　御勝手へ入
一御押　引之
一御滴　引之
一御老女、御介添前同断御恭悦申上候事

たちぬひ

西山たい子

（九十二）燕鳥口

之はふろしきの如き四角の切れを袋にしたるにて、學校行きの書物、或は琴うた、長うたの本等を入るゝに用ゆるものなり。單なるは、四角の切れを圖の如くたゝみ、の所を裏よりぬひ、ひきかへし、ふちを三折にして、ふろしきのふちの如くにぬひ、三角にとがりし所に紐をつくべし。合せにするには、まづ四角なるものゝ一片だけを裏表

合せて、裏よりぬひおき、前圖の如く折りて、同じ所を裏よりぬひ、ひきかへし、殘りをる一片を絎るなり。

附す。もち袋は、まづ切を圖の如き形に裁ち、縱に二つに疊み、廣き方を口とし、狹き方を底とし、ぬか袋の如く、底より脇を袋にぬふべし。合せなるは、まづ裏表合せて、四つぬひになし、口にて絎け、よき所に紐をつけおくべし。

だいどころ

一ぼら

此魚を、稱して、出世魚と云。初め溝川に生じ、夫より川に出で、海に出で、遂に數尺の大いさになるが故なり。されど、祝賀の折に多く用ひらるゝものなり。期節は、九月頃より翌年の二月頃迄とす。料理方は、刺身、鹽燒、又味噌汁に用ふるも宜し。

一鰹

期節は、七月より九月迄とす調理方は刺身、味噌煮、蠟燭燒、味噌漬、煮肴、たゝき、たゝきとは三枚におろし、廻りをいぶし、刺身の如くきりて、たで酢杯にて用ふるなり。霜降鰹と稱し、身を三枚におろし、熱湯に投れ、直に取出せど、上部は白く、内部は、生身のまゝにて、赤し、之を横に小口からきるときは、美なるものなり。之に期節の青物を添へ、山葵醬油にて用ふ。

一鯖

八月より十一月頃迄を期節とす。此魚は、腐敗し易き魚なれど、注意すべし。料理方、刺身、鹽燒、甘酢、味噌煮、味噌漬、又すし種に用ふ。

一いなだ
七月より九月迄を期節とす。刺身、煮肴に用ふ。

一わらさ
十二月より翌年三月迄を期節とす。調理方、てり燒、さしみ、味噌漬等に用ふ。

一しらまさ
一月より三月迄を節とす。てり燒、さしみ、わん種に用ふ。

一しよ子、かんは
期節は前同樣、用ひ方も同じ。





秀歌集（廿四）

鹽井正男

春風の霞吹きとくたえまより
　乱れてなびく青柳の糸

○之は新古今集春歌上の部にありて、殷富門院大輔が百首の歌よみける時、春の歌とてよめるなり。○春風のかすみ吹きとく。春風が、立ちこめたる霞を、吹き分くと云ふことなり。○たえま。絶えたる間といふことにて、風に吹きとかれて、霞のたえたる間を云ふなり。○みだれて靡く、春風にみだれて柳の靡くことなり。

○一首の意は、春風が霞を吹き分け、霞の絶えたる間より、春風にみだれてなびく青柳の糸が見ゆるよと云ふ事にて、さつと吹く春風に、霞の破るゝ折り〳〵、その間より、緑の青柳のなびくさまの、ほの見ゆるけしきにて、誠に畫を見るがごとく、けしきうかびて、優に美はしき歌にこそ。

○

うすくこき野べの緑の若草に
　跡まで見ゆる雪のむら消え

○之も同集同部に宮内卿千五百番歌合に春の歌とてよみたまへるなり。

○うすくこき、或は淡く或は濃きと云ふことにて、若草の緑の色の淺深あるをいへるなり。むかしには、かゝる時には「うすきこき」といひたるを、近かゝる口つきを初めたり。○跡。雪のきえはてたる後を云へるなり。○雪のむら消え。まだらに所々消え殘りて、消ゆることなり。

○一首の意は、野邊の若草の緑の色の、或は淡く、或は濃きさまにて、雪が一時に消えずして、むら消えをして消えゆきたる跡かたが見ゆると云ふことなり。即ち雪の早く消えたる所は、若草がはやく萌えしゆゑに、緑濃く、雪の久しく消え殘りたる所は、若草も遲く萌え出でし故に、緑の色うすきなり。故に、若草の緑の淺深にて、今は殘らず消えはてゝはあれど、消えゆきたる時分のむらきえのさまが見ゆると云ふことなり。宮内卿が千五百番歌合に、此の歌をよみたまへる時は、まだ極めてわかかりしときのことにて、増鏡に、詳しくその時のことあり「男も女も、此の御代にあたりて、よき歌よみ多く聞え侍りし中に、宮内卿の君

と云ひしは、村上の御門の御後に、俊房の左の大臣と聞えし人の御末なれど、はやうはあで人なれど、つかさあさくて、うち續き、四位ばかりにてうせにし人の子なり。まだいと若きよはひにて、そこもなく深き心ばへをのみよみしこそ、いとありがたく侍りけれ。

この千五百番の歌合の時、院のうへ、のたまふやう、こたみは、皆、世にゆりたるふるき道のものどもなり。宮内卿は、まだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなむ。かまへてまろがおもておこすばかりよき歌つかうまつれとおほせらるゝに、おもてうち赤めて、涙ぐみて候ひけるけしき、かぎりなきすきの程も、あはれにぞ見えける。さてその御百首の歌、いづれとりどりなる中に、

うすくこき野への緑の若草に
　　あとまで見ゆる雪のむら消え

草のみどりの、こきうすき色にて、こぞのふる雪の、遅く疾く消えけるほどを推しはかりたる心ばへを、まだしからむ人は、いとおもひよりがたくや。この人、年つもるまであらましかば、いかばかり、目に見えぬ鬼神をも動しなましに、若くてうせにし、いといとほしくあたらしくなむ。」とあり。げにをしむべき限りにこそ。

○

あら小田の去年のふるねのふる蓬
　　今は春へとひこはえにける

○之も同集同部に曾根好忠がよみて題知らずの歌なり。○あら小田。荒田のことにて、をは、語勢を助けむために添へたるのみ。荒れたる田の義に

て、耕作せざる田を云ふ。こゝにては、春の田の、いまだ去年のまゝにて耕作せざるを、さして云へるなり。○去年のふるねのふる蓬。去年の秋、刈りわりたるあとに生へたる舊きねの舊き蓬といふことなり。○春べ。春のころといふことなり。萬葉二の巻に「春べには花折りかざし秋たてば紅葉かざし云々とある春べ。また、彼の有名なる「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くや此の花」とある春べと、同じなり。○ひこばえにけり。古き蓬の株より、新しく生ひ出でたることなり。ひこばゆといふことは、孫生の義にて、すべて、草木の斬株、古根などより、新しく生ひ出づるをいふ。

○一首の意は、あら田の去年のふるきねのふるき蓬までが、今は春の頃なりとて、新しく生ひ出でたりと云ふことにて、ふるき蓬といふことを、ふる根のふる蓬と云ひて、ふるを重ねたる所は、語調の上に面白き詞の技術なり。この歌、風調いみじき歌のさまなり。

○

思ふどちそこともしらす行きくれぬ
花の宿かせ野邊の鶯

○之も同集同部に藤原家隆朝臣が攝政太政大臣家百首歌合せに野べの心をよみたまへるなり。○思ふどち。思ひ合ひたる友だちの事にて、心あひたる親しき友のことなり。○そことも知らず。そこを其の所とも知らずといふ意にて、即ち、こゝを何處とも知らぬことなり。○行きくれぬ。「ゆく程に日が暮れた」といふことなり。○花の宿かせ。花の宿を貸してくれよと頼みたる意なり。○野邊の

鶯。のべのうぐひすよど、よびかけたる詞づかひなり。

○一首の意は、心ある友だちづれにて、春の野遊びに出で、こゝをぞこども知らず行くほどに、日が暮れたり。今宵は、此の處に旅寢をせむ。野べの鶯よ、花の宿を貸してくれよと云ふことにて、この歌は、かの古今集の素性法師の「思ふどち春の山べにうちむれてそこともいはぬ旅ねしてしが」と歌ひたる願ひを取り來りて、その願の如く、思ふ友どちうちつれて、春の野遊びに出で、其處とも知らず行きくれて、旅寢をなすやうによみたる歌にて、古歌を用ひたる手振より、野邊のうぐひすをよびかけて、花の宿かせよとたのみたるあたり、誠に面白く、此の卿の文才の非凡なるを見るべく、且つ優にしてはなやかなる歌のさま、誠に此の卿の長所たり。

○

いそのかみふるき都を來て見れば
　昔かざしゝ花咲きにけり

○之も同集同部にありて題もよみ人も知らずの歌なり。○いそのかみ。大和の石上にて、昔、安康天皇は、石上の穴穗の宮におはし、仁賢天皇は、石上の廣高宮におはしたまひて、斯く其の上の都たりし所ゆゑに、ふるき都といへるなり。即ち、いそのかみふるき都は、いそのかみの舊き都といふことなりま。また、いそのかみと云ふ詞は單にふるといふ詞の枕に用ふることあり。例へば萬葉の四の卷に「石上ふるとも雨にさはらめや妹があはむどちぎりしものを」或は、古今六帖の二の卷に「いそのかみふりにしならの都にも色はか

はらず花は咲きけり」など云ふ石上なり。これは、石上に布留と云ふ所ありたれど、石上布留とつゞけ、はじめは、布留と云ふ地名の枕詞に用ひたるを、後に轉して、降る舊きなど、すべて、ふるといふ詞の枕詞に用ふるやうなりたるなり。されどこの歌なる石上は、單に舊き都のふるの枕詞に置きたるにあらずして、石上のふるき都とさしたるなり。〇むかしかざしゝ花。昔の人が頭髮にさし飾りてめでたる花と云ふことなり。昔の人が、花を頭に挿したることは、萬葉の五の卷の歌にも、「梅の花今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛りなり」、或は十の卷に、「百敷の大宮人はいとまあれや梅をかざしてこゝにつどへる」などにて知るべし。梅のみにあらず、櫻にても、藤にても、すべて、花はかざすことをせり。紅葉などもかざせり。萬葉十の卷に、「春日野の藤はちりはて何をかもみかりの人の折りてかざゝむ」、或は、八の卷に、「手折らずて散りなば惜しと我が思ひし秋のもみぢをかざしつるかも」など、なほ多し。後にもすることにて、古今集より以後の歌にも、あまたあり。

〇一首の意は、石上のふるき都に來て見れど、むかしの人の挿しかざしてもてはやしたる花が、今もかはらず、寂寞たる舊都の跡に、ひとり咲いたワイと云ふことにて、詞やさしく、感情ふかき歌なり

源氏物語講義（五）

下田義天類

桐壺（四）

父の大納言はなくなりて、母の北の方なむ、いにし

への人のよしあるにて、親うちぐしさしあたりて、世の覺え華やかなる御方々にもあらず。何事のぎしきをもてなし給ひけれど、とりたてゝはかゞ〃しき御うしろみしなければ、事とある時は、なほより所なく心ぼそげなり。

○父の大納言。これより桐壺の更衣の身分のことを、夫となく、說き起したるものなり。父は更衣の父なり。上には、いと止む事なき際にはあらぬがといひたれど、確と其の分限を言ひ顯はさず。こゝに至りて、其の父は大納言なりし由をあかしたり。大臣家などの女ならねど、いと止む事なききはにはあらぬがと書き出したれど、大納言の娘とあれど、決して下賤のものにはあらず。其を、始にればゝしく言ひ出したるは、專、他の女御更衣等のをとしめそねみ給ふ筋を强めむとて、態と云ひ殘したるものなり、作者が抑揚の筆法を思ふべし。さてこゝに、其の父は大納言なりし由をいひながらも、殊更に其の父母のことをとかず。猶事とある時は、據所なく心細げなりといふことの抑揚の材料として爰にさし挾みたるは、文意を幽玄ならしめて、讀者にその餘情を味はゝしめむとの結搆なり。共に微妙の意匠といふべし。

○母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて。いにしへの人のとあるの文字はなからといふほどの義なり。なからをのといふこと、中古文の常なり。此のもの語には殊に多し。よしある人とは、由緒ある人の義なり。何かと作法故實等の素養あるよしなり。母北の方が、古代じみたる人ながら、作法故實等の素養ある人にて。といふほどの義なり。

○親うちぐしさしあたりて、世の覺え華やかなる御

方々。これは、他人を取り出して、母北の方の後見に比較をとりし語なり。揚語中に今一箇の揚語をさし挾みたるものなり。親うちぐし。とは、兩親具備してなり。此の更衣のやうに、母親一人にあらず。兩親具備して、諸事の介添ひに拔け目なき外の女御更衣等よりは。といふ義なり。言をかへていへば、父の威光もあり、母の後見もありて、何事の儀式。晴の場などにも、先は世間におくれを取らず。華やかに上下の人々に尊敬を受くる所の他の女御更衣の方々よりは立ち勝りてなり。

○何事の儀式をもてなし給ひけれど。晴々しき朝廷の公事節會などの儀式なり。母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにてといふ所を、直ちに此の所へ續けて心得べし。

○とりたてゝ、捗々しき御うしろみしなければ。母北の方が、上に云へるやうに、能く心を用ゐて介酌はし給ふものゝ、肝心の父大納言は、早く物故し、兄弟叔伯などもなく、誰ひとりたよりにすべき男子もなけれど、女の身のかなしいことには、唯蔭の幕の世話を燒くのみにて、はか〴〵しき御後見も出來ず。何ぞと一ッ角替りたることなどある折には、いくら母御が利發の人なりとも、猶ヤッパリ心細そうに見ゆるをりも有りたりとなり。○はか〴〵しきは、しッかりとしたるなり。○御うしろみしのしはたすけに添へたる助辭なり。○心細げのげは、他より推側することゞなり。そうなといふ俗言にあたれり。

さて此の一段は、少し句法に亂れたる所ありて、ふと見ては、其の意味明瞭ならざる憾みあり。中世より寫し誤りたるものか。作者がふと取りはづし

て書きたるものか。とにも角にも、此の儘にては、完全無缺の句法とは云ひ難し。抑此の句は、更衣の心細げに宮仕へするよしを、一句の主要として書きたる所なり。事とある時は、猶より所なく心細げなり。と云ふ所、即主要の言語なるべし。其の以上の數語は、皆此の語を排置せむ爲の抑揚に附加したるに過ぎず。抑揚は抑へて揚ぐるか、揚げて抑ふるかの二方あるのみ。即抑語の次へ揚語を置くか。揚語の次へ抑語を置くか。此の二法より外有るべくもあらず。されど、時によりては揚中に揚を加へ、抑中に抑を加ふる一法あり。これを三段抑揚といふ。即、抑々揚とか、揚々抑とか、抑揚々か、揚抑抑とか、序づるものこれなり。この外には紛はしき事有ることなし。今こゝの句を見るに、抑揚抑と序でたり。これ其の意味の明晰を缺きたる原因なり。初學の人の爲に、これを左に説明すべし。

父の大納言はなくなりて(抑)母北の方なむいにしへの人のよしあるにて親うちぐしさしあたりて世の覺え華やかなる御方々にもおとらず。何事の儀式をもてなし給ひけれど(揚)とりたてゝ捗々しき御うしろみしなければ事とある時はなほより所なく心ぼそげなり(抑、即主要なり)。かくのごとく、抑揚抑となれり。一方を抑ふるは、その一方を揚げむが爲なり。一方をあぐるは、其の一方を抑へむが爲なり。抑へて揚げて、また抑へては、抑揚の甲斐あらはれ難し。これ其の意味をくらましたる以所なり。此の所作者も少し迷ひたりしにや。抑より揚へ移る時も、揚より抑へ移る時と、其の移りめは、必逆に落すこと文法の常なるを、こ

の始の、抑より揚に移る所をぞ、自然法の逆には落さで、かへりてこれを順に落したり。これ、作者の心中に、何となく落着よからず思ひし故に、かくの如く其の形式を改められたるものなるべし。されど、形式は如何に改めても、其の精神は改まり難くして、猶抑語たる性質を存せり。排列の順序其の法を誤りたるが上に、また此の違式の形体を造くれり。これ、其の意味をくらましたる第二の所以なり。源氏物語といへど、徹頭徹尾完全無缺なるものゝやうに思ひ僻めたるものもなきにあらねど、決して然らず。如何なる奇腕妙手の名家なりとも、時によりては取はずすことなきにあらず能々撰び分けて、其の誤りを襲はざるやうに注意すべし。たとひ、其の法は誤らざる事なりとも、稀に見ゆる少數の例をとりて、常にある多數の例に背かむことは、多數の人の許さぬことなり。況むや、その誤例を蹈襲するものをや。此の所、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて。といひてこのなむといふ係辭を結ばず。何事の儀式をももてなし給ひけれど。と續けたるも、多くの定格とは違へり。二段結即紐鏡の、中の段にて結ぶべきなり。今これ等の法にかなへて修正せむとには、宜しく行止法を改めて二句とすべし。即、

父の大納言はなくなりて　補　世になき人となりたれど（抑）母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親うち倶しさしあたりて、世の覺え華やかなる御方々にもおとらず。何事の儀式をももてなし給ひける　（揚、即主要なり）

されど（揚）取りたてゝはか〳〵しき御うしろみしなければ、事とある時は、なほより所なく心細げ

なり。

など、やうにあるべし。句法の正當不正當は、くらべ見ばおのづから了解せらるべし。

歌人としての今川了俊

安藤正次

古來幾多の變遷を經つゝも、その自由發展の姿を失はざりし和歌は、鎌倉時代に至りて、所謂和歌の師範家なるものを生じ、終には、二條家、冷泉家の流となり、あはれや和歌は、その家々に法式規則の束縛をうけて、狹隘なる範圍に窘縮せられざるを得ざりき。然れども、天地の美をうたひ、自由の思想を詠ぜむといふことよりは、歌合に織巧をきそひ、百首に速吟を衒はむことを目的とせる、公卿、女房等の閑人の間にありては、寧かゝる秘事口傳などの多くして、傍見深きが如きを、めづらしみよろこべるなるべし。かくて、この風は滔々として底止する所なく、益その窮窟を加へ、足利氏の紛亂時代にありても、猶已然として保れたりき。然れども、この時代にありても、歌は猶殿上人一輩の手にのみありて、武家の間にはあまり廣まらざりしかど、冷泉家は是が覇權を握り、弓矢とりては公卿を木偶とも思はざる武將も、和歌に於きては、甲をその門に脱がざるを得ざりき、彼の九州探題としては、威名遠近にかゞやき、言塵集、道ゆきぶりの著者としては、この時代にありては珍しき文學を有したりと稱せらるゝ今川了俊その人も、實に和歌を冷泉爲秀の門に學びき。されど、その窮窟なる法式規則の、束縛無意味なる秘事口傳の繁雜は、彼のこゝろよしとせざる所、彼は實に和歌における關門打破の先鞭をつけむと試み

たりしものなり。今茲に彼の意見を叙するに先ち、その和歌に於ける經歴如何をみむとす。彼は實に生れながらの武將にして、且歌人の系統をもうけたるものなり。その了俊辨要抄に記す所をみるに、

愚身十二三才の時、祖母の香雲院仰せられしは君達のやうなる御身は、歌といふものをよまずしては、淺ましき事なり。かまへて、よくもあしくもよまみ給へよ。歌よまぬ人は面を垣にしてたてらむが如し。と申すなり。よまずすぎ給はゞ、恥にて候べきことぞよ。父御れうなど、としよりわまが教てよませ給ふぞ。されど、人の親の才を不續は、いふがひなき事ぞ。と教へ給ひき。

とわり。以て家庭教化の深かりしをみるべし。かくて彼は、始の程は「たゞ古歌をよみ、八代集をよみならして「わづかによみいでたるに過ぎざりしが、廿餘才の時、冷泉爲秀の門にいりて、そのうくる事となりぬ。彼は、落書露顯にこの事を記していはく、

愚老か冷泉家の門弟にれもひ定めし事は、爲秀卿の歌に、秋風といふ題にて、

情ある友こそかたき世なりけれひとり雨きく
秋の夜すがら

此の歌いかゞ侍りしにや、心にしみて侍りかど門弟になり侍りしなり。

彼がこの時より文學に熱心なりし事知るべし。彼はまた晩年に及びては、連歌の道をゐきはめて、當時の風体を正さむと試むるに至りぬ。

和歌に於きて冷泉家の門に入りしとはいへ、彼は武

士の兒なりき自由思想の勃如たりし紛亂時代の兒なりき。彼は窮窟なる束縛を欲せず。すべてに於きて自由を欲せしと等しく、和歌に於きても亦然りしなり。然れども、その自由は、決して不規則を意味せるものにあらず。和歌の用語雅俗の區別等にありては、幾分かの範圍あることは、彼も之を認めたる所なれども、その秘事口傳を唱へて、自、道をせばむることあるをいとひしなり。落書露顕に左の如き一節あり。

鎮西に侍りし頃、三代集の説、又萬葉集等の不審を、数寄の人々の間開侍りしかど、存知の分をあらく申て侍りしを、二條家の門弟兼好法師が弟子命松丸とて童形の侍りしかど、歌よみにて侍りしが、出家の後に愚老がもとに扶持したりしが云、如此の秘説等を無左右人に仰せらるゝ事、無勿体存なりといひしかど、愚老返事に云、尤しかり、但この道に心ざしある人々にあながちに可秘事にあらず、就中及末代ては、古今集のきゝ昔にみゐたる事知らざる人なし。又顕眼法師の説に、號㆓顕眼註密勘㆒物に、定家卿、或は同せられ、或はさらはれたるにより、至㆓古今秘説㆒者無殘所なり。その内に、只二三ヶ所をこそのこされて侍れど必しも、我等ぞかり可秘にあらざるなり。又萬葉集の秘事口傳の事なり。昔の仙覺律師の説とて、由阿法師といひしものあまたの人々に教へしより、此秘説も、今は昔に下りたる上は、我等ぞかり非可秘なり。然れども、説のたち所は、家人々ればしませど、今の冷泉爲尹卿傳受せずしては、私の自見ぞかりは、天下の人不可用なり。同事なれども、我等

やうのものの申すは、道に成すまじけれど、少々は申すなるべし。かの家になほも秘事とて被隱たる事どもは、門弟なれども、愚老等不存知間人にをしふるに及び侍らず。たしかに存知の事は、數寄の人々どかりには、いかでかへだて侍るべき。今も少々被尋人々には申す也。

「此道に志ある人々に、あながちに可秘事にあらず」といひ「門弟なれども、愚老等不存知間」などいへる、その意うかゞひ知るべし。流石に冷泉家の門にある故に、世を憚りたる意のなきにあらねど、

また彼が應永十年正月の書なる和歌所へ不審の條々といへるものをみるに、數千言恐くその氣焰を吐露せしもの、當時詠歌に、歌言、たゞ言の區別をかまひ、すしくいひのゝしるものから、その區別の定かならざるをいひ、歌の模範を一体に定めむとするを難じ、その各個の才をして、自由に發展せしめざるべからざるを論じ、二條家の冷泉家をそしるをせめ北野の法樂歌合の偏頗の弊をうたがへなるど、言皆背綮にあたり、論理整然たり、以て彼が時流より拔きいでたる眼識ありしを知り得べし。勿論今日よりみれど、迂腐の譏を免れざるべしとはいへ。

了俊辨益抄は「愚老が歌をよみならひし事を申さば、おのづから稽古のたよりともやなり給ふべきと存候間せめての數に申也云々と端書して記せるもの、彼は是等に於ては、たとひ定家の三五記等の範圍をいでざりしとはいへ、歌道に關して初心者の爲に記せることいと懇切なり。その藝術的良心の必要なることを説きては、

廿余の頃爲秀卿の門弟に成て、詠歌の教をうけて、朝夕よみもてゆくまゝに、詞もつゝけやす

くなり、風情も心にうかぶにまかせて、その体をいひあらはすに相かなふ詞のかまへいたされき、その歌を歌ごとに、爲秀卿に申合しかど、歌の心は同物にて、替言とて同言ながら、まさりたる詞をなほされし間、それにしたがひて、次第に心づきしなり。この替言といふことを左右なしゝは、初心の時用捨不叶候。しかれども、巧の入にしたがて、形如今は替言はやすくなりたるなり。是をあしく心ゑては、たま〳〵よき歌をよみたるをも、わろき事にとりかへて、いたづら事たるべし(下略)

一、我詠る歌を人に見せ合すべき事、歌も連歌も我作のよしあしを分明に覺る事古の上手達のも大事々々。吾よりもおとりたるとおもふ人も、人の歌の善惡をぞよく知といへり。まして、堪能上手に、殊更見合てなほさするを故實といへり。此事師說なり。又人の歌を我に見せ合手するをぞ、相かまへて〳〵心をへだてず、我が見及心に存る筋を可云なり。あしきをも、おもてまげによしといひ、よきをわろしと云べからず。數寄は自他不可有外心　事云々同類歌等を人の心得させられたるは有がたき心ざしなり。

といひ、又餘情の必要なるをときては、

一、相搆て古歌の中にも、殊更上手達の中に餘情の有歌どもを、とりわけ心をしづめて詠吟して味たまふべきなり。

といへるなど、かゝる類いと多かり。いづれもとり〴〵におもしろし。

またそのあらはす所、落書露顯なるものあり。和歌連歌に關する彼が意見をかきあらはしたるもの、當

時二條家の流をくめるもの〻、往々冷泉黄門爲尹の歌を、とやかくいひの〻しるが多かりしを論破し、一方に於きては頽れそめたる連歌の道を正しきにかへさむとつとめたるものなり。（連歌の事は本題の外に渉れど、別に題を設けて論ずることあるべし）今一々所説を示さむは煩はしけれど、これをとゞめ、茲にはたゞ彼が書中にゑらびいで〻あげたる古歌を記して、以ちて彼の趣味を窺はむ料に供すべし。

彼が心にしむ歌とてあげたるは、

身にさむく秋のさよ風ふくなへにふりにし人の
ゆめにみえつゝ

かくむかりへかたく見ゆる世の中にうらやまし
くもすめる月かな

世にふるはくるしきものを槇の屋にやすくもす
くる初時雨かな

又

ふりそむる今朝だに人のまたれつるみ山ゝ里の
雪のゆふぐれ

まつ人のふもとの道はたえぬらむ軒端の杉に雪
つもるなり

小初瀬や峯のときは木ふきしほり嵐にくもる雪
の山もと

初瀬山月は高根にかたぶきて嵐にのこる鐘の一
聲

の類をもあげたり。又詞の限なくきこえて、心のいたりおもしろく存ずる歌とてあげたるは、

移りあへぬ花の千くさは結ばれ風のうへなる
宮城野の露

只今眼前におはえたる歌としては、

おきてみる朝けの軒は霜しろし音せぬ風は身に

さむくして

をわけたり、又、

龍田山嵐や峯によはるらむ渡らぬ水もにしきたゑたり

の歌を評して、古歌にすがりてよめる歌のごとにおぼゆる歌といひ、

消えなくに又やみ山をうつむらむ若菜つむ野もあわ雪ぞふる

をも古歌をとりたるおもしろき歌といへり。又只今さしむかひてみる心地する歌といふ評の下に、

ふりつみし高根のみゆきとけにけり清瀧川の水の白波

よりは、

ちくま河春ゆく水はすみにけりきえていくかの峯の白雪

を心の今一重出來たりいへる、又風情心のわなめづらしとおぼゑ、巧なる詞つかひのおもしろき歌といへる評の下に、

峯の松聲の時雨やそめつらむ晴るゝ嵐に山ぞいろつく

の歌をわけたるなど、その當否はさておき、一種の批評眼をそなへたりとやいふべき。

以上は、たゞに談理における彼が一班をうかゞひたるにすぎず。猶彼が創作の上に充分の批判を加へざれば、本題の主旨を全せりといひかたかるべし。されど、今はその暇を有せざれば、後日を待ちて之を成さむ。

以上記せる所、たゞその大要を示しゝにすぎず。されど、要するに、彼は紛乱時代の武將として軍陣に奮闘したりしが如く、文學界に於ても、縱横に戟を

ふるはむと試みたりしなり。たとひ、尤分の成功をみざりしとも。和歌に對しては一家の見地をたて、徒に奥儀秘事をとなふることを排せるなど比較的に自由思想を有せる點よりしては、彼は實に當時にありて得がたき文界の將星たりしなり。彼が文士としての名は、決して紛亂時代の暗黒中に葬られはつべきものにあらずして、その武名と、ともに世に忘らるべからざるものなり　（完）



漫録

主從心得草（上編續）

諏訪忠元寄贈

在心大僻正のいわく、主親師匠につかへて、他所を見ざる人あり。是大吉の人なり。井の内の蛙といふはよろしからず。是、大忠義孝行の人なり。笑ふべからず、尊むべし。と有。此一類あり、大方は善人なり。又、一切の善事を、眞實心よりいたす時はいひぶんなし。若誠の心より出來にくき人は、まづ假にも、うはべ斗りにも忠義孝行をいたすべし。是又よき道に入の方便なり。悪敷事は假にもいたすべからず。若假にも悪事をすれば、是又悪事なり。孟子にいわく、仁義の眞似をする人は、是仁義を行ふ人なり。盗人の眞似をする人は、是盗人なりといへり。（擬敵の文なり）又いわく、志にはましめず、功にはましむとも、又仁心仁聞ありて其政なしとも仰られたり。是善事に入の近道なり。心に盗たく思へども、身に其業をせねば、縄目にはあはず、心になくとも、身にそのわざをすれば、是非ともに罪科のがれ難し。近

くはある御方御遊行の節、孝行の眞似をしたる人に御褒美下し置れ候事、大岡政要實錄に見へたり。御名將のなされかたに氣をつけてしるべし。又、八百屋お七は家を燒人をさわがせしは、渠がこゝろにあらず。只戀人にあはん爲なり。されど、咎は不義にありて、火付にあらず。然れども、所作をかりたるゆかりにて、火あぶりになりしは、是非もなき次第なり。假にもなしたる咎の遁れがたき事見るべし。醬油を入れど醬油德利、酒を入れど酒德利となる。今人も其如く、假にも善をすれど善人なり。惡をすれど惡人となる。かまへて、假にも惡をすること勿れ、つとめて善をなすべし。又、學文の學といふ字は、眞似といふ心なり。何のまねをするとなれど、徃昔の聖人君子道德の行ひを眞似て、終には其德にいたるとの義なり。よき事を眞似て、よき人になれ〳〵、孟子にいわゆる、道は邇きに在て、是を遠きに求む。事は易きに在て、これを難きに求む。人々其親を親とし。その長を長として天下泰平なり。といふが如し。歌に、

よき事はまねになりともするがよし
いつしかなれてまことにぞなる

是手近きをしへなり。よきに似よ〳〵、

右之條々本道とは思ふべからず。唯善事に進み難きを押て勸むれど堂室にもいたるべきの手段なり。然れ共、不信の人は、右に習ひて善事に進み給ふべし。是善人の仲間うちなり。

最明寺殿歌訓百首（三）

福原堇子寄贈

我ものをゝしみて人に物を乞ふ

心にくまぬ人はあらじな

己れの物を惜く思ひて、人の需に應ずる事あたはずも、其心をおして、人もさぞあらんと思ひ、叨に人のものを乞ひ需むべからず、又己れ人の物をこひ得て、たらざるを補ひ、心に嬉しと思はゞ、是を以て、人の心を量りて、人の需に應ずべし。此の如く己れを推て人に及ぼすを、仁の方といふ。然るを、今の世の人は、慾に迷ふ故に貪ぼりて飽ことなけれど、わがものを惜みて與へざるも、人に乞ひて得る事なけれど、さま〴〵に罵詈て終に人の惡みを招き、いはれなきいさかひを爲して身を破滅するにいたるは、淺猿しきことならずや。

われ人に惡みしことは忘れても
人の恩をぞながくわするな

わづかなるものを人に與へて、大いなる恩を施せしと思ひ、色にも出し言葉にあらはして返報あらん事を思ひ、又人の恩を受ては、其當座は嬉しく思ふやうなれども、程經て後はうち忘れて何とも思はず結句仇をなすものあり、總じて人に物を施こし恩をあたへて其返報を思ふは、只己れの爲にして、眞實の仁恩にあらず。然る故に、恩をあたへたる人の禮なく報いなければ、怨り腹立て、其あたへたるを後悔し、今更取かへさまく欲するは、今の世の人情なり、されども、人の恩を蒙り情を得ては、ゆめ〳〵忘る可らず、恩を知り義を知るを以て人とす、然らずんば鳥獸に等しきなり、崔子と云へる人の座席の銘に、人に施しては謹むで思ふ事勿れ、施しを得ては謹むで忘るゝ事勿れと、古人の道をしたふ事深いかな。

かりものはわが品よりもこゝろして
用ひをはらも返すべきなり

人の物を借用ふる時は、初めより心をつけて成丈大切に取扱ひ、用ひをはらば改ため揃へて、速やかに返すべし、粗想に用ひ、又は永く留て、きずつけ紛失せばいかゞすべきや、愼むべし〳〵。

物乞ひにあたふるものゝなき時は
　　言の葉のみも情あたへよ

乞食非人等の門に來りて物をこひもらう時、力の及ふべきだけは施行すべし、急なるをすくひきはまるを助くるは仁の意なり。もしあたふべき物なくとも言葉あら〳〵しく面にくさげにいふ可からず、かゝる身となり果たる悲しさを知るべし。

まづしきにつけてもいとゞ思ひしれ
　　前の世からのむくいなりとは

其れ貧賤にくるしむといふ共、必ず世を恨み人をかこつ可からず、能々因果の道理をわきまへしるべし、現世の果を見て過去未來をしるといへり、此世に於てまづしきは、過去生にて人の物を貪ばり我物を惜しみて施す事をしらず、慳貪邪見なりし因によりて、此果を來したるが故なり。努々人をも世をも恨みかこつべからず、此理を能わきまへ、此世にて善根を植うるは、過去の罪自然に消滅して、富貴にも立至るべし、つとめよや〳〵。

身をつとめてあまる財を欲するは
　　まづしき人にほどこさんため

小人愚人の財寶を貪るは、是を以て物にほこり榮花を極めんとなり、善人君子は財寶をねがはずと雖も、貧窮飢寒の輩を見ては、施しすくはんと思ふ心切なるにより自ら儉約して、僅の有餘ある財も皆慈善の爲に用ふるなり。故に財寶は持つ者により重寶ともなり、又あだともなれり、大學に、仁者は財を以て

身をおこし、不仁者は身を以て財を起すと、又財集まる時は、民散ず、財散ずる時は、民集まるといへり、仁者は財寶を施し用ひ、諸人の歡心を得て國を保ち家を起し、不仁者は財寶を貪ぼりて人の恨を招ぎ身を亡ぼし家をやぶり國を失なふなり。

かすならぬ身をとふ人のこゝろこそ
　いつはりのなき情なりけれ

富貴には他人も集まり、貧賤には親戚も疎んずるは、なべて世の常なり、人をたづね、訪ふは禮節の爲とは雖も、世にある人を尋るは多くの諂ひの爲にするものにて、おちぶれてたよりなき身を訪ふこそ、誠にありがたき仁義の心ともいふべけれ、苟くも人と交はるには富貴に諂はず貧賤に誇ることなくして、信を盡さんことこそあらまほしけれ。

まよひぬるこゝろの雲のはれぬれは
　智慧も情もありあけの月

心の雲とは私欲の事をいふなり、人の心は本來あきらかなる事月の如く、照さゞる隈なし、然れども、人欲の雲におほはれて、義理の良智暗く、其欲を滿さんが爲に不義非道を爲すは、わが生れ得たる本來の心に背きたるものにて、悲しきことならずや。されど、古歌にも「雲はれて後の光りと思ふなよもとより空に有明の月」と、唯つとめて人欲に迷へる雲を拂ひ、義理に良智をひらけば、慈悲圓滿の心の月あきらかなりとぞ。

ひろく世をめぐむこゝろをさきにして
　よろづの費いとふべきなり

人驕に長ずるときは、財用たらず、上たる者はこれが爲めに、或ひは年貢を重くし、又はあらぬものにまで課役をかけて、下を虐げ民のなげきを重ね、下

たる者も其身の分限を顧みずして、人の恨をひき、其身を亡ぼすに至る、故に國天下をしろしめす人は、國中は申すに及ばず、四境の外、野の末山の奥までも、萬民其樂を樂しみ其利を利として、悖逆爭奪の起らざるやうに、常にこゝろざしを用ひられ、萬事驕りをといめ、儉約を守り、萬民鼓腹の樂しみを樂しみとし、下たるものも其分限を守り、厚く施し、廣く惠みて、心廣く體胖ならんことを要すとなり。

上の上下のしたまで世をわたる
身のくるしみも皆くにのため

上天子より、下庶人に至るまで、皆それ〴〵職分ありて、空しく安居する事なきは、天下國家を利することをつとめて、身命をも抛うつ君臣上下の本分なり。然るを、己れひとり隨ひて、逸樂を求め、酒に長じ色に迷ひ、其職分を勤ることを知らず、此の如き者は、終に家をやぶり身を亡ぼす、もつたいなきことなり。

井蛙小錄

井上頼文

おのれさきつころより病にかゝりてうちふしがちなるに、醫師より書見ることは更にて、文かくことをさへにとゝめられたり。されど、つれ〴〵なるまゝに、かねて選を誂へられたる詠草どものうちより、ひとふしありとればゆるをうなゐにぬきがきさせしめたるがいさゝかつもりたれど、

待郭公　太田弘直

まちわびてこよひもふけぬほとゝぎす
草のいほりにひと聲もかな

初郭公　同

れそさくらみめくりつゝみとめ來れは
　ひと聲たかくなくほとゝきす

水邊藤　河原悦子

むらさきのゆかりも見ねて山水の
　そこまてにほふ藤波のはな

雨夜燈（あまよのともしび）　總根歷

（八）日本國殿下へ和蘭國王より
奉献候貢物目錄　山田記抄

一和蘭王姿畫　一枚
　但身ノ丈正寫ニ仕候テ附ク和蘭國高名ノ畫工エハンテルヒルスト〔人名〕ノ筆ニ御座候
一水晶大燭臺　二枚
　但五方ニ火燈候樣拵有之
一同大花生　一
　但造花添有之
一六挺込短筒　一揃
　但一箱入
一カラベイン筒　一挺
　但短筒一種之名一箱入
一新刊地圖　一
　但歐羅巴洲諸國之圖集有之
一同大　一
　但和蘭領分東印度之國ニ有之
一シユリナメ〔人名〕道中記　一冊大
一和蘭國領所東印度風土記　三冊全
一東印度草木之繪圖　二冊全
一瓜哇草木之繪圖　三冊全
一日本草木之繪圖　一冊中
一同獸類之繪圖　四冊全
一星學ニ拘リシ地理書　二冊全
一地理書　一冊全
一星學書　二冊小
一天文書　五冊全
一デガラーフ〔人名〕之星學書　一冊全
一ハンカダンス〔人名〕之星學書　一冊全
一總世界之風土記　一冊全
一萬物之説錄　一冊全
一サテルニス〔星名〕之輪之説錄　一冊全
一ユシケ之拝星説錄　全
一星學稽古書　全

一ハルレイ之彗星説錄　仝
一天文書　仝
一彗星觀察之書　仝
一萬物之記錄　仝
巳四月
森山源左衛門印
森山榮之助印

(九)朝鮮世系

大祖李成桂十四世

宣祖昭敬王昖 明隆慶元年即位 ― 廢王光海君琿 萬曆三十六年即位
― 仁祖憲文王倧 天德三年即位 ― 孝宗宣文王淏 清順治六年即位
― 顯宗彰孝王棩 順治十六年即位 ― 肅宗元孝王惇 康熙十三年即位
― 景宗宣孝王昀 康熙五十九年即位 ― 英宗顯孝王昑 雍正二年即位
― 眞宗孝王緯 乾隆四十一年即位 ― 正宗莊孝王祘 嘉慶五年即位
― 純祖成孝王玜 嘉慶十五年即位 ― 翼宗孝明王旲 清光五年即位
― 憲宗哲王烉 道光十四年即位 ― 哲宗英孝王昇 道光二十九年即位
― 今王 熙 同治二年即位

(番外)祖谷山談

此程なれる日本名勝地誌南海道之部阿波國美馬郡の條を見るに、鳴瀧、葛橋等とつゞきて舊家とて、

西祖谷山村に阿佐某といふ者あり、平國盛の遠裔なり云々

と誌したり、こはさきに麿が引出し、阿佐家系圖、即其家の事なり。

この家の事に、祖谷山の古事と共に、史料通信叢誌及び大八洲學會雜誌などにくはしく誌したれど、つきて見るべし、風俗には面白きこと最多く見ねたり。

御倉百姓(一)

明治維新前、百姓は御倉百姓になりたいといひつ、そは家來のうちへ、かほよき女なれど、めかけ奉公にとられ、御用すめど家にかへさる、そのわし

きくせをいやがりて、御倉百姓になりたいとはいひつるなり。

蔓橋の俗謡(二)

かつら橋かずれはしとて、二十はどもあらん。吉野川のさるはしの如くなれるが、ながさは三十三間水のれもまで三十三間、いわたる様は、山脈のつきあひたる所に、大木あるに、、、、、シラグチといふ蔓ぶだうの蔓の如きものにて、くりの木にてつけて、幅七尺ほどかつら堅横の組目は、兩足そろふれどふみぬくるほどなり、南によりたる所なれど、深山なれど、降雪一丈斗つみぬゆゑに、かく目あらく組てかくるなり。目荒けれど雪たまらざるなり。すけなき所にいたれど、甚あやふし、他に路なけれど、此所をゆきかふなり。所の者どらよくわたるなり。

いやの蔓橋や　蜘蛛のゐの如く
風もふかぬに　ふら〳〵と

衣服(二)

かうぞの皮を切て蒸して皮とさはがし、はして水に入れて踏み荒皮とるゝをはたきて麻の糸の如くしてつむぎて、衣ものをつくる、こはとげの間を往來するゆゑにつくるなり。近き頃まで、木綿の衣きたるものなかりし、黒くそむるなり。

猿の讀書(四)

村と村との間なるがけの間を通る學校生徒讀本をれとしけるに、取らんと思へど取り得ず、非常の岩石ある所に、二三十の猿よりつどひて、れちきたりける讀本をひろげてよまんとするが如し、かたはらなる小猿がやく〳〵さわぎゐたりき。

雨夜の獨語

白松園主人

卯の花くたし、ふる雨に、日曜もむとくになりぬ、とて、いといたう怨み暮しつ、夜に入りては、いよ〳〵降りまさりて、板屋漏る、軒の玉水音のみ高く窓の小笹の、風にさやぐより外には、をとづる友もなく、はた語らはん人もあらねば、うづくまりたる膝、たて直し、洋燈のひかり掻きたてこしてにじり、書きに記しぬるは、此のすゞろ言なりそも〳〵頃は花橘の、匂ひやかなる折なるに、野末の虫の、かごとめきたるは、我ながら、いとなつかしからぬ、わざなんめりと、をもふものから、獨りごと聞く人もあらじと、思ひかへしてなん。折しも、夜くだち、人靜まりて、雨すこし止みぬる雲間より、新月夜の影をかしう、庭の芝生の、露きらめきわひて、青葉の梢涼しげなり。あはれ山郭公の、一聲もがなと、思ひぬるもをかし。

（一）

（い）をのれ十六の歳に、吾妻にのぼりてよりは、草枕旅にのみ、日を送りぬれど、固より定れる住家なく、浮萍の根を絶えて、水のまに〳〵、さまよひぬるが如し。あるときは、人の家の二階に住みあるときは、台處つゞきの二疊を借り、さては長屋つゞきの、陋屋に居りしこともありて、いつまでかかくてあるらむ、今に至るまで、かはることなし。すべて自ら炊ぎ、自ら炙、有れど飽まで食ひなきときは燒芋一つにて、過こしゝこともをはかれど自から足れりとすれど、不足とも思はず。かく常に人の家をもて、住家とすなれど、さま〳〵の家庭を目擊して、よきにつけ、惡しきにつけ、

我身の師友とならぬはなし。或は主人無學にして兒女の敎育を知らず、或は妻女かたましくて、夫を侮り、さては我子賢しと、誇るもあり、はた身の不幸をかこちぬるも、少からず、かゝるが中に大方家の欠點は、皆妻女の欠點より、生ぜざるはなし。いと節儉き、婦人かと思へど、吝かにて毛の末ばかりのことをも爭ひ、いとゆほびかなりと思へど、飯炊く事すら知らず、少しく文字ありと見れた、そこにも思ひあがれるなど、げに完全なる婦人は、かばかり稀なるにやと、うたてし。おのれ中にも、言しても、筆しても、云ひ盡しがたき、世に淺間しき、婦人を見たりき、此の女、普通の敎育もあり、人に接しては口辯あり、容貌も、さばかり醜からず、その夫なる者は、いと閑散なる職にて、何とかやいふ、淸まはり、忌まはることを、つとむる身なりけるが、夫婦共、揃ひも揃ひし、怠惰ものにて、造化の神といへども、かゝる配劑は、六づかしかりなんと驚かれぬ。朝は冬ならば、早くとも九時、夏は八時頃までは、朝日花やかに輝くにも、戸を閉ぢたるまゝ、夫婦床にあり、漸く目をさましぬるかと思へど、先づ手を、二つ三つうち叩きて、下女を呼び、烟草の火を持ち來らしめ、暫くして又呼びて、戸を開かしめ、今は起き出づるかと思ふに、復び眠りぬ、または下女を呼ぶこと再三、よその見る目もいたづがはし。しかのみならず、盛夏の折なるにもかゝはらず、眞晝をも憚らで、夫婦諸共に晝寢す、さても、當然の事なりと思へるにや、人見れども何とも思へらず、婢僕を使役すること、極めて酷に情けなく、却りて猫を畜ひて、いたはる事甚だ

至れり。常に仰樣に寢ながら、人を使ひ、三尺離れたる物をも、人に命じて取らしむ、下女を傭ふばかりの用もなきに、身分にも似ず、奥樣を裝はんがために、これを置きて、飲食ふときにも侍らして、給仕をなさしむるなど、いとをこなり、其上癇癪ありて、折々凄まじき聲して、婢僕を罵ること、銅鑼を鳴らすが如く、媚びて亭主に甘る聲、猫に似たり。あはれいかに、舅姑なく、其夫の愚物なるにもせよ、女として、あるまじき行爲は、沙汰の限りとも、何とも、名づけんやうなし。其夫の愚なるを、初めより知りながら、其身動き勉むることの、厭はしきより、心にもあらで添ひをるとぞ。かゝる女は、世に多く、ありぬべしとも覺えね共、之れも亦、身の戒とするには、好摸範なるべし。

(ろ)おのれ元來、芝居寄など、見聞くことを好まずされど未だ、一度も行きしことなかりしに、すぐる頃、友の强ひて勸むるに、默止がたくて、初めてある寄席に行きて、落語を聞きたりしが、その猥褻、實に言語道斷にて、聞くに得堪へねど、直ちに逃げ歸りぬ。その云ふところ、悉く遊野郎の行爲を、若き男女に紹介するにて、風俗壞亂とや云はんも、道義破壞とや云はんも、中々におろかなるべし。かの店頭に、裸體寫眞を賣るをぞ、禁じられながら、何の故に、此のあさましき、蕩子淫婦のわざを敎ふる、寄席をぞゆるされたるならん、世の父兄之れに心付かず、兒女をして、行いてその傳習を受けしむことよ。近日外山文相、かゝる者の都下にあるを、嚴禁せんとすと聞く、げに其の淫邪の媒介物を、掃ひのくるにあらざれど

朝に修身倫理を授くるとも、夕にこの惡風潮に、驅らるゝに於ては、何の甲斐かはあらん。世の父兄教師たる者も、日頃よりつとめて、かゝる魔窟に、行かしめぬやう心すべきことにこそ。

おのれは、都下の小學校について、女子教育を見るに、實に慨歎すべきことのみなり。試みに、その遊歩場にて、遊ぶさまを見よ、既におとなびたる者等は、男教員等の周圍に居並びて、いとなまめきたる、言語句調にて、恰もその友に、戯むるゝ如きことを、うち云ひ、逐ひつ逐はれつなどして見るさへ苦々しき限りなるが、此の怯れ褻れやすき、女子等は、その教授時間に於ても、憚ることもなく、ざれぞみたる言をもて、その教員に戯むるゝを、常とすアヽかゝる有さまにて、女子教育の發達を、謀らんとするとも、根蔕既に腐れては、その詮甚だ覺束なかるべし。吾人は小學校に良教員なきを悲むこと切なり。

蘇小妹三難新郎（三）

湘玉女史　節譯

さて老泉は、其まゝ直に睡に就きたるが、夜半に至り全く酒醒め、荊公の許にてありし事を想起し、女兒の才を誇るにてはなかりしに、今介甫が、兒子の窓課たる一卷を我に點定することを囑みたるは、親を求むる爲めの下心ならん。此親事は吾が願ふ所にあらず。されども、申込れたらんには、之を推辭の計なし、いかゞはせんと沈吟して遂に曉に到りたり。老泉其儘起出、面を洗ひ髪を梳りてのち、かの王雱の作りたる一卷を取出して、次第に隨ひ之を看る、實に荊公が誇るも無理ならず、篇々皆錦繍

の如く、字々盡く珠璣を列ぬたるに似たりけれど、女兒覺えず王雲の才を愛る意動きたり。されども、女兒と繋がる緣あるや如何は知り難たけれど、先づ這の文卷を女兒に覩せしめ、女兒の愛するや否やを試みんと考へ、姓名の記したる個所をば隱し、丫鬟を呼びて吩咐るやう、這の文卷は、或る少年名士の、我に寄せて點定を求めたるものなれども、我近頃閒暇なければ、小姐に批評をたのむなり、閱完りし時は、速に回話をくれよとて、彼の卷を丫鬟に遞與しければ、丫鬟は大老爺吩咐の文卷を小姐に傳達しけるに、小妹は硯に露を滴し、朱を研り、頭より批點し、須臾の間に閱し畢り、感歎して道ふ、是眞に好文字なり、聰明才子の作る所ならん、但文の秀氣泄れ盡し、華にして實なし、恐くは長く此世に留まる器にてはあるまじとて、遂に卷の面に批して云ふ。

新奇藻麗是其所長。含蓄醞藉是其所短。
取レ魁科則有レ餘。享ニ大年則不レ足。

此批評の意は、文字の新らしく奇らしうしてつやかざりあるは此人の長所なり、奥深き意味を含ませておつとりおちつかせるは此人の短所なり。故に此文筆を以て、試驗に高き點を取るには十分なれども、長生きをすることは難かるべし。となり。後來王雲は十九歲の時に試驗を受け、頭名狀元に中れり、狀元は試驗及第せし者の一番優等の名なり。且狀元には三種あれど、王雲は其第一を得たるなり。斯く文才ありたるも、惜いかな、幾程もなく夭亡せり。是にて小妹が人を知る眼の明かなるを見るに足る。這は是後の話なり。さて話前にもどり、小妹は批語を寫し了り、丫鬟を呼び、文卷を父親の手許へ還しけり。老泉はこの批語を見て大に驚き、この批語を記した

るまゝては、いかで回復すことのなるべき。もし此儘回復すときは、必介甫に怪まれん、かく卷面を汚損したるを如何にして取繕はんと苦心の折柄、堂候官早既に門に到り、相公の鈞旨を奉け、昨日の文卷を頂戴し、且老爺に御目にかゝりて稟上たき事ありと取次の者に述ぶ、取次の者其趣を老泉に通じけれど、老泉此時苦しみたれども、只得なく卷面の批語を割去りて、新き紙とどり換へ、親手ら上好き批語を書き加へ、堂候官を呼入れて遞與しければ、堂候官は之を懷中に收訖りて、更に道ひ出るやう、相公より別に仰附られたる旨あり、そは他にあらず、貴府の小姐は早や許嫁ありや否や、もし未だ他に約束なければ、願くは秦晉の好を結びたしとの事なり。老泉道ふ、相府の御相談はありがたき事ゆゑ、どこまでも仰に從はねばならぬ筈なれども、爰に一個のさしつかへあり、小女は至て眉目醜く、とても金屋の選にあづかるべきものならず、この由よろしく稟上げられたし、小女の眉目あしきは、外にて問はれなど自ら知れる事にて、老父が事に推托て辭退するにあらずと、叮嚀に話しければ、堂候官は立歸りて、右の次第を荊公に復命し、文卷を呈しけり、荊公先つ卷面を披き見たるに、紙の取換たる所ありしかど、既に三分ばかりは面白からず、又蘇小姐の容貌眞個に不揚や否やは判然せざれども、もし彼が言ひし如くならば、兒子の意に中はざるやも計り難ければ、先づ密地に人を差はして打聽せたる上にすべしと、蘇家との相談を見合せたり。原來蘇東坡學士は、常にこの小妹と戯に、互に嘲り合ひけるが、小妹まづ東坡の一嘴に鬍子のあるを見て、

口角幾回無㆓覓處㆒。忽聞㆘毛裏有㆑聲傳㆖

此意は、口が何處に在るか分らぬゆゑ、此處らが口角と思ふ處をよく視ても覓られぬ、折柄忽ち毛の裏から聲の出るのを聞きて、さてはあの毛の裏に口があるかと思ふとなり。

東坡は又小妹の額顱凸起なるを評して、

未出庭前三五歩、額頭先到畫堂前。

此意は、庭前へ出で三足四足歩むか歩まざるに、早や額頭は奇麗な座敷の前に至ると云ふの意にて、額のいたく張り出るを云ふなり。

かく評されて小妹は、又東坡の下頤の長きを嘲りて云ふ、

去年一點相思涙。至今流不到腮邊

此意は、去年吾が好きな人を思ひて泣きたる涙が、今年の只今に至るも、長き下頤に支へられて、流るることの出來ぬゆゑ、腮の邊に到らぬとなり。

東坡は、小妹の雙眼微し摳みたるを見て復啓て云ふ、

幾回拭眼深難到。留却汪々兩道泉。

此意は、幾回も眼を拭へど、深く凹みて居るゆゑ、手がとゞかぬ、夫が爲に、兩眼から出た兩道の涙が、汪々とたまり居るとのことなり。

かくて、訪事的は、此兄弟の嘲り合ひたる話をきき出し、速に荊公に復命して道ふやう、小妹の才と氣位は質に高く絕れたるに相違なし。されど、容貌は平常なりと、荊公は容貌の平常なりと聞きて、姻事を求る心もうせけれど、其後は絕えて言出ざりけり。然るに、荊公か親を戒めたりとの事よりして、小妹の才名は京城に播き滿ちたり。其後親事の諧はざりしと聞き、面會を求めんとするもの門に滿ちたり。是等の人に對し、老泉は誰れにてもあれ。都て文字を呈さしめ、其文字は女孫兒に與へて撿閲させたり。

小妹は多くの文字を閲し、一筆にて塗抹ものもあり、又兩三句を見てのちに止めるもありけるか、其中只一卷文字極めて好く出來たるあり。卷の面に姓名を寫して秦觀と云へり。小妹はこの卷の面に四句の批語を題して云ふ、

今日聰明ノ秀才。他年風流ノ學士。
可レ惜ム二蘇ト同ロスレ時ナ。不レンハ然ラ横ニ行セン一世ニ

此批語の意は、今日はまだ聰明なる一個の秀才なれども、後には必風流の學士たるべし。されど、惜きことには、大蘇小蘇の二人の大才子と同じ時代に生れたるゆゑ、此二人の上に出ることは出來ぬなり。若し此二人がなくぞ、一代の間天下の文人中に横行すべきにと、明かに秦觀の文才、二蘇の間に在りて、二人を除くの外、すべて及ぶ者なしと評したるなり。

老泉は、女兒か秦觀を選び中てたるの意を察し、門上に吩咐て、秦觀と云ふ人來りなは、主人の待ち居るとて案内せよ、他の人は、都て謝絶すべしと言ひ置きて、日々秦觀の來るを待ち居たりしに、文卷を呈したる人々は却て信をき〻に來れども、いかなる譯か、只秦觀のみは姿だに見せざりけり。さてかの秦觀秀才は、字を少游と云ひ、揚州府高郵の人なり。腹は萬言に飽き、眼は一世を空うし、生平敬服するは只蘇家兄弟のみにて、其他の人は一向氣にと〻めざるなり。この頃に、小妹の才子を慕ひて、玉を衒ひ售んことを求めたれど、又自己の名譽を損せんことを怕れて、他の文卷を呈したる人と共に消息を尋ね問ふ抔のことはせざりしなり。

老泉は秦觀の到らざるを待詫て、人を秦觀の寓所に遣りて招待の意を致さしめたり。少游は心の中暗に

喜びたれども、又考ふれど、小妹の才名は人より傳聞せし而已にて、面り其才を試みたるにあらず、且其容貌よからず、額は出て、眼は凹みたるとか聞けど、如何なる鬼の如き臉ならんも知れず。されど、先づ他の面を一見して放心せんと思案し、内々小妹の外に出る日を打聽たるに、三月初の一日には、小妹が岳廟へ參詣して燒香する由聞得たり。さて其日に至り此機會にと思ひて衣裝を改換めたり。（以下次號）

才くらべ

蓬生屋女史

いと女の才

たゞ智者は悖がはずと、むかし若狹の國三方郡早瀬浦の農に、佐左衞門といへるあり。其の妻名をいとと云ひて性質いと温順かつ利發にして、常によく舅姑にまめやかに仕へ、孝養怠らざりけるが、姑さきにみまかりて、舅ひとりとなりぬるに、いとよく〳〵心をつくして仕へけり、舅齡やう〳〵八旬を超え、老耄して、愚にかへり、やゝもすれど非理なる言を以て、いと女を云ひ罵れどいと女は少しも逆ふことなくたゞ其の心にまかせて奉養怠らざりけり。或る日の事、その妻他へ行きて歸りけるに、舅は藁をひき散らして、孫と遊び居りしに、妻女は見るまゝにこやかに詞かけ、何をかなし給ふと問ふに、今子を娩むまねして遊ぶなりと答ふるをきゝ、さらば妾も子を娩んとて、又や納屋なる藁一束をとり出で、もろともに敷き散らし、子を産むまねして、共に〳〵に戯れ遊びけれど、老人いたく興に入り、よろこぶこと限りなかりしとぞ、これおろかなる事に似て、中々智あるものにあらねど、かやうになし難き業なり、

又一年の冬ごもり雪深う降りける日、舅何を思ひ出で、ゝや、茄子の羮を食べたしと望みけり、時ならやすき事なれど、いかで冬深く



茄子のあらむ道理もなきに、いと女は、心よく諾ひ、そはいとやすき事なり、さらば市へ行きて買ふて來れむ、時暫まちたまへとて、俄かに走り出で、ある寺へ行きて、漬けたる茄子を請ひ求め來りて、鹽氣を去り、早速羮として進めけるに、舅はたゞ夢中味は知らず、已が望むものありしをよろこび、食せしとぞ。萬事かうやうなりしかば、老耄の舅もたゞよろこび、慈母の如くに慕ひたりとぞ。かくてぞ誠の才とや云はまし。

笑ひ草

蓬生屋女史

井戸屋と屋根屋との喧嘩

ふりつゞく五月雨にふる屋の軒の下くづれ、雨もりて家の中に蛙すみ、ひるわかんさま、うつとうしき

五月雨の空も、樗の花の散るまゝに、向ふが山、夕日さすもめづらしう、小夜ふくるまで月影の明くもるも流石にをかしけれど、修繕しおかずば、又もや夕立の雨にわびんとて、二日三日たちて、屋根屋をよび、こをつくろはせぬ。折りしも、にはかの旱天、暑さ頓みに加はりしかど、コレラ之より起らん、衛生こそ肝要とて、井戸屋をよび、井戸をかへさせ、はてはどぶ掃除はさだめ掃除とうき世のうき事しげきもうき世をしみての業なり。

さて朝まだき屋根屋井戸屋、日雇等來り、一ぷく煙草くつゆらし、各々職にかゝらんとしたるとき、屋根屋井戸屋に向ひ、之れから地獄へおちるのかねと戯れしに、井戸屋怒りて、何ぞ、地獄におちると、山猿奴、之れから木のぼりか、貴様こそおちぬやうにせよと雑談より駒出づれど何ぞ山猿と、何だ蛙め、皮ひむかれぬやうにしろ。此畜生め、此虫けらめ、とんぼめ、魚くづめと互ひに罵りあひしが、何でもよき、己れは天に登るから、貴君ははやく地獄の下へ下りろと屋根屋はのゝしりながら屋根へ上ぼりてしたり顔なり。何だとんびめ、あぶらげやらうかなと罵りながら井戸屋、井戸の中に入り、エンヤラヤラと、聲と共にはや綱をひくに、見ろ地獄の鬼どもが、火の車引くやうやなど云ひて、上には屋根をふきふき笑ふに、何の烏め、屋根の上のめしつぶを拾ふのか、はつ、はつ、はつ、畜生、のけ／＼などとて、下には鳥追ふまねするをかしさ、共に罵りあふほどに、夏の長き日もやう／＼亭午、下女が仕度も出來たれど、食事をうながすに、下女まづ井戸をのぞき、井戸屋さん、もう上がつて御飯おあがんなさい、屋根屋さんもうおりて御べんたうをおつかいなさいと呼ぶ

に、ざまア見ろ、下りて食へと云はれしならん、此方には上がつて食べと云はれしぞと、のゝしりながら、井戸の蛙の網に引きかゝりて上がりて、ゐらがるもをかし。

笑子笑談集

金津常十郎

長生の傳授

ある家に、二人聲をあげて泣者あり。外より入來りてそのゆゑを問ふ。泣者の曰、我ら二人昨夜の夢に、神の告げ給ふは、汝ら兩人とも、今より三年の内に死すべしと御つげ有り、かき失せ給ふよと見て覺めたり。故に、二人共哀むといふ。來れる人の云、さらば二人の年はいくつなるや。答て曰、それなる人はことし十八歳、われは五十九歳なりと。來れる人亦云、然れば貴殿は、それなる人より四十一歳生のびて居らるゝなり。さある時は、十八歳の人こそ哀む事も道理と云べけれ。貴殿はそれなる人より四十一年此世の樂みあり。それに、同じやうな哀みはちと不都合なものかといへば、いや然らず。たとへ百年生て居たも、十年生て居たものも、其死ぬ日に成ては、どれも哀みは同じ事なり。わき目から見たら、なる程、ちと譯が違ふて見ゆるも尤なりといふ。來たる人其時いふやう、あまり二人とも悲まるゝが笑止なれば、われ一子相傳の長生の妙法を御傳へ申べし。この法は、わが生て居たい程、自由に生らるゝ妙術なり。先貴殿はいかほど生たく思ひ給ふや、五十九歳の人云けるは、あまり長生も慾なれば、何卒

今より千年生たしといひ、又八十八歳の人云、われは千年もあまり長すぎるから、三百年にてよしといふ。そこで來たる人いふ、もし各〻望の年月がたちて、其の死ぬ日にならば、いかゞし給ふや。兩人云、其死ぬ日にならばそれぎりにて、思ひ切るといふゆゑ、さらば數へ申べし。そも〳〵この法は、人々心の持やうにて、其望ほど生て居らるゝなり。貴殿も以前にいはるゝ通りにて、たとへ何千年生ても、その死ぬ日になると、其心持は、即けふ死ぬも同じ事なり。然れば、貴殿、只今が望の千年たつて、其死ぬ日に成りたと思ひ給へ、夫、さう思ふと、後にまだ三年程の樂が請合てできるが、なんと安樂な事ではないかといへば、彼兩人忽ち哀がそこへやら往てしまい、是から毎日笑ふてくらす。

註に曰、萬物自然の命數有て遁れがたく、又量りがたし。それをも知らずして、漫に死を遁れんことを神佛に祈り、又は加持祈禱に財を費して、なげき哀む愚俗の迷を開くべき爲のたとへなり。もし加持祈禱が役にたつ物ならば、大名や富家に夭死する人はない筈なり。是ばかりでも、明めのできることなり。九十で死したも、五つで死したも、皆自然の數にして、人の量り知る處にあらず。彼二人が笑ふて暮したるも、所謂自然の命數あることと明らめたるゆゑなり。しかし、平生暴食し、それが爲に内損して死したり、又は閨中の私がすぎて、腎虚して死したり、或は河へ身を投たり、首括りたりする類を、是らも自然の數じやとはいはれず。これは、是、私に自然の數をそこなふものなり。さて、又病も同じことにて、尤其癒ゆる癒ゑざるは、是則自然にして、人事に慮れずと雖

あゝ此病も、自然の數じやとて放下して置くは、又非なり。やはり其病を治す藥を用ひずんぞあるべからず。先にも云通り、自然の數は人事に處れざるものゆゑ、成るべきだけ人事を盡して後は、自然に任すべきなり。但し、加持祈禱類は、天下の愚俗を治る具と知るべし。

梅の下風（三）

白魚女史

伊勢は津でもつ、つは伊勢でもつ、賢父良妻そろうて家はもつ。げに、柏原宿の森田屋銀五郎、前の妻の世にあるほどは互みに質直、質貞、宿かるものも信ずれぞ、はしたものもよろこび、家内たゞ東風あたゝかされもひして、梅も笑へぞ、櫻もはゝ笑み、鳥も歌ひ、蝶も舞ひ、こしのしらねの雪も、此處にはたゞ花か、霞か、しら雲か、たつ絲遊か、たゞ世やれもしろう、時やあたゝかう覺えけるを　あづさ弓一年妻女がかへらぬ人となりしより、又むかしの春はなく、夫にも子にもやさしからぬれ早は、家をも思はず、已がしりのみあたゝめ、一枚の給はりものとよろこびたる前妻が着物、あるかぎり已が物とせしあげく、これも宿屋風情の妻がつくりしものとて品がらわろし、それも賤しき人が仕立やう、之も下品なり、下等なり、人がらわろしなどとて、不足たら〳〵、はては欲するまゝ着、好むまゝ食ひ、寢たきまゝいね、云ひたきまゝ云ひ、したきまゝをなして、たゞ己が子のれ花を伴ひては、彼處の神へ詣でくる、此處の寺院へ參りくると、僞りの神だのみ、母子つくりたてゝは、花居、花見、ゆさんのあるかぎりをつくせぞ、家僕もうらみ、客もいつしか他へ



うつり、森田屋の軒、うき事のみしげりゆきて、銀五郎いかに心をくだくも詮なく、獨り思ひふかす夜寒の空に、お早はなほ他處の男と語りあひて、ひとりあたゝかき思ひ、事をつくりては衣類を出し、金錢をもち運び他出たえぬに、銀五郎あまりと制すれど、かゝる家に居たくなし、まゝ子は居る、仕ふものは皆朴助、骨のみ折れる、宿屋風情の家業は我れにはむかじ、出すなら出し給へ、ただ三年、四年、おそでのかしづき、水仕のわざ、仕ひ給ひし給料、拂ひて、去らせ給へとうそぶくさまの憎くらしさ、あまりのふてゞとに、銀五郎かつと腹立ち、ありあふ煙管もておのれといふまゝしたゝかに打ちしに、お早は仰山なる聲立てゝ泣きわめくに、おどろき飛び來る男女、今しもあんどん掃除なし居るお兼も駈け來り、此のさまを見て驚き、父がたもとにとりすがり、こは何とし給ひし、ものにや狂ひ給へる、母樣はやうにげ給ひてやと、日來の呵責のかへし、心よしとも見ず、小さき腕に父をなだめ、母を慰さめ、袖ひきて脇へやらむとする少女が手を母ははやはきつとにらめ、父の子顔する小しやくな。おろかでも、母はまま子などの仲裁をうけむよりはこのまゝぶち殺されむがまだしも、油がつく、のきねとて、さももきどうに袖を拂ひのくるに、銀五郎はまた更に怒り加はり、誰か小さきこんな水くさきものに油ろうぢなどさする、花奴はどうした、他處へ遊び居るとあまりの怒りに口もたびれ、手も震へつ、又も捧もてうたんとするに、あな父さんゆるしてよ、母さんがお云ひつけなされしにはなく、私しがすきでせし事、もう明日からは致しませぬ。姉さんと一緒に遊びますから、母さんにそんなにお怒りなさらでよと、子

供ながら、己が罪として父をなだめ、母をかばふ心を母はなはよろこびず、中々に憎らしげに、睨め、わの小しやくな、亭主の前の見世仕事は、大人になりての上、父の前の見せ仕事して、またわのやうな罪被ぶり皃、どこまで賢された子さまぞと、小聲につぶやく顔もわざけり皃のにくらしさ、銀五郎今はえ絶えず、俄かに走りて、ありあふ刃物持ち來り、もう許るされぬ。退くなとて、切らむとするに、お早も今はおどろきわなゝきのけぞ、娘もおどろき、父が足にしかとしがみつきて、父さま、心しづめてよ母さんゆるしてよ、父様決して／＼、母様のおいひつけではなく私が／＼さし出たる用、もうしませぬしませぬ、父様勘忍して下され、父様が母さまを殺すなら私しをさきにおしおきしてよ、父様誰か早く來て、父さまを止めてよ、誰かよ／＼、こはくはないから誰れでも來て止めてよと、ひとり狂氣の如く呼びさけび、すがりなだむる天性異なる上智の少女。一たん逃げまどひし男女も走り來りて、やうやう刃物をもぎ取り、はだを入れさま／＼なだめても、なだまらぬ銀五郎は、なほ口惜しき眼に睨めつけ拳を固め、うたむとすれど、身体しびれて仆れしまゝ起きもえ上らぬに、娘はまた更におどろき、父様父様とて、すがりつき、泣く／＼手をさすり、足を揉み、たゞせむすべ泣くぞかりなり。





山新樹　　東久世通禧

みなれたる軒はのやまも水枝さし
高きをそふることゝちこそすれ

市中梅雨　　久我建通

うらんとていちにたはねし菖蒲草
そのまゝくちんさみたれの頃

待開郭公　　本多忠貫

村雨のはるゝ外やまのほとゝきす
まつかひありし今のひとこゑ

初郭公　　水野忠敬

若みとり色そふやまにほとゝきす
なくはつ聲のめつらしきかな

郭公遅　　前田利聲

去年なきしころになれとも郭公
ことしはいまた聞ねさりけり

山家水　　諏訪忠元

流れゆく清水のたとにこゝろをも
あらひてすめるやまかけの庵

朝梅雨　　宮地嚴夫

降そめて久しくなれとけさもなほ
はれんともせぬさみたれの空

曉旅行　　小出粲

一杯のかと出のさけもさめはてゝ
わかつきさむきたひ衣かな

夕郭公　　植松有經

墨そめのゆふへの空をつくつくと
ちかめてをれは鳴ほとゝきす

夕水鷄　鎌田正夫

うつき咲山田のなはて日はくれて
過こしかたにくひななくなり

夏山　岩崎勝從

よそめたにゆかしく見ゆる夏山に
住ひといかにすゝしかるらん

孤夢未結曉鐘急　藤井行麿

夢もまたむすはぬものを夏の夜は
なとかくあけの鐘いそくらん

殘花少　三輪義方

はつかにも花こそ殘れみつゆさし
月たにもらすなれるこのまに

夕蛙　草野隆道

小山田に水ひきぬらし此のゆふへ
こゑはまたにも蛙なくなり

中村栗園抄　佐々豊水

あそひものうちこはちけん撫子の
花はゝそのかけにはへり

郭公　林甃臣

ほとゝきす二聲なきてゆきにけり
あめはらつきて月くもる夜に

首夏山　足立正枝

わけ行かは殘れる花もありぬへし
また色あさきなつのやまのは

寄玉祝　安齋篤敬

怠らすまこゝろこめてみかきたる
玉のひかりや世をてらすらむ

馬　宇井正夫

空かける心地こそすれいさましく
はせ行く駒のたゆみあらねは

河夏月　木庭芳香

なつの夜の月影きよしやまみつを
むすへは袖にたまそくたけて

生命保險　伊東祐賢

なきのちのあとを頼むか世の中を
こゝろもとなく人のおもひて

竹亭夏來　伊藤純三

花の上にいとひし風もなつかしく
窓のわかたけうちなひきつゝ

船納涼　鍋島榮子

大川のみつの上ゆくふねのうちも
ゆふへはことに涼しかりけり

避暑　稅所敦子

かはかみの糺のもりのしめの內は
ひるも暑さをゆるささりけり

山新樹　下田歌子

我山はおほかたかしのはやしにて
わかはもひとつみとりなり鳬

湊川懷古　小池道子

あたなみはたちかへらしを湊かは
神のこゝろにまかせはてなは

田上螢　松平健子

早苗とる人はかへりしかきつ田に
かけあらはれてとふほたる哉

海邊夏月　小笠原艷子

いそやまの松の夜あらし音すみて
夏なはさむきつきのかけかな

池杜若　岩崎寧子

つり殿のをすかゝくれはいけ水の
深くもにはふかきつはたかな

夏鳥　原田蒼生子

たもたかの生ふる汀にしらさぎの
色もすこしく見えわたるかな

雨後新樹　中牟田常子

村雨のなごりしられてなつ木たち
まはゆきはかり露そきらめく

岸上藤　小川直子

たそさくらちりてなかるゝ山川の
岸のいはねにかゝるふちなみ

梢正行母　柴田靜榮子

はゝそ葉のなけきのつゆにちて櫻
色香たへにもさきいてにけり

花前言志　清水靜子

昨日までさかりの花もかせふけは
散りてはかなき世にもあるかな

豐國神社獻詠長歌並短歌　大畑弘國

豐國のかみのみことの　そのかみを思ひ渡せは
苅菰のみたれりし世に　かしの實の獨ぬけいて
大君のみことかしこみ　やき鎌の利鎌をとりて
醜草をなきてはらひて　駒のつめつくしの海ゆ
百千舟かちとりよろひ　言さへく高麗に百濟に
古のうちつみやけを　定めんとまけのまに／＼
わし曳の山もぬくへき　大丈夫をおともひ給ひ
渡つみのたはかり深き　人さはにつとへ集めて
虎はゆる國のくさきも　神風にいふきまとはし
國主等もわびゆる迄に　言むけし神のいさをは
天地のいやとほなかく　萬世につきひのことく
照りわたるらむ。

短歌

あまつそら月日の影のよろつよに
神のいさをは照りわたるらむ



●大御惠　去し四日、新潟縣、中頸城郡、直江津にて、火の災にかゝりしもの數多ありしを、聞召し給ひて、天皇　皇后兩陛下より、金千七百圓を惠ませ給へり。

●北白川女王　滿子女王殿下と申すは、かの臺灣討伐の折にうせ給ひし北白川の宮殿下の御息女なり。いと聰明におはしまして、今年十二歳にならせ給ふ。さきに、御身を養はせ給はんとて、相州葉山の高崎男爵の別墅におはせり。時に高崎男爵さもらひて、朝夕になぐさめ奉り、やがて御暇まをして、東京に歸られしが、後、御許より御文をたまはりて、その末に、

高崎か歸つてしまひ其の後は
　唯何となくさびしかりけり

とかきつけさせ給へりといふ。むかし八歳の宮御歌よみしたまひしことは見ゆれど、今の御代にしては、いとめでたきことになむ。

●宮中歌御會　本月の御兼題詠進は左の如し。

人のもとに螢をおくるとて

數こそはすくなかりけれ君かため夜露にぬれてとりし螢そ　正風

是をみよ草はくちてもすゑつひに螢は玉のひかりありけり　迪通

我獨みるかなしさにとりなきし螢をわけてけふおくるなり　直大

里川や水ふく風のすゞしさもつゝむ螢にそへましものを　豐穎

籠の内にこめし光をおこたらぬ學ひの窓のしるへとはみよ　利嗣

みよかしな何の光もあられともわかるさ川をてらす螢を　承昭

文よまむ窓のともし火闇くともこの光をもあはれとはみよ　銓

文をよむ人におくらん心よりわれもほたるをあつめける哉　長猷

窓の内に集むるよりは庭の面にはなちてみませこれの光を　光昭

君かため石山のへにひと夜ねてかりねしせたの夏虫そこれ　利宅

文まなふ窓の光となりぬへく君におくりしほたるなりけり　忠敬

夜光る玉江のほたるあつめきて君かすさひに贈るなりけり　濟

君かためとりてかへりし心さし深草のへの螢となしれ　美稲
ふみをよむ人の心の窓もてらせとおくるほたるなりけり　通治
文學ふ窓をてらせよなく／＼にとりしほたるを友に贈らん　長延
草深きのへの螢をこにいれてみやこの人におくりけるかな　任子
涼みにといてしこよひの手すさひにとりし螢を贈るなり兒　文子
心ある君におくらは草むらのほたるも玉のひかりそはまし　祥子
おくらんと思ふ心はあつめたる螢のこにもあまりけるかな　其子
かけうすき螢もひかりそへなまし君か學ひのまとに放たは　敦子
籠にこめし螢の影に思ひやれのへのかりほのよるの景色を　道子
夏草のつゆふみ分て君かためとりあつめたるほたるなり兒　いさ子
やみのよにあさちか露をふみ分て君にとさりし螢なりけり　衆子
草群にもゆる螢をかりとりて君にさゝけむめつらしきまに　好子
我友のまたみぬうちに贈らはやこよひはのへに螢かりして　錏子
露深きのへのくさむらかき分てわかあつめたる螢なりけり　いさ雄
獨して見むかなしさにわかやとの池の螢をきみにおくらん　三枝
とりためしのへの螢を言のはの道しる友にまつそみせまし　愛
數はまたすくなけれともこの螢れい爲にとさりあつめたる　嚴夫
かりにたにくるかとまちし夜々の思ひの數を一目みせはや　正臣
草隱れいつまてつゝむひかりそも今は雲井に思ひたゝなん　秋香
草ふかきゐなかすまひも光あるこれはかりこそとり所なれ　榮
籠の内をあはれと思へ君故に我もかくこそねわたりけれ　有經
やり水にかけみむ人の涼しさはこの螢にもおもひやられて　殿雄
こかれてものへにあつめしこの螢君か學ひの窓てらさなん　榴郎
夏虫の光をきみかことのはの花にそへてもみまほしきかな　亞澁

こゝにためて贈る螢をぬは玉のよすからまとの火影ともみよ　有義
ふみまなふまとの光をそへんとて螢を君におくるなりけり　行久
只一つふたつなれともきみにとて子らかとりてし螢なり兒　綱二
珍らしき程にとさりつ時はまた卯月のほたる少なけれとも　正夫
これをみてまつなくさめよ螢狩獨もれにしこゝろのこりを　胤明
草深き野中のいほにすむ我ももゆる思ひはありとしらなん　英一
螢籠にこめておくらんよしもかなゆふへ涼しきかもの川風　義濟
うなゐこかいまとりゐたるこの螢庭の小陰に放ちてもみよ　久子

●日本赤十字社　神奈川支部（一縣を一支部とす）にては、こたび、女子社員一千人を增募して、一千五百人となせしが、去し廿六日、横濱學校にて、その總集會をもよほし、總裁小松宮殿下、御臨場あり。且、東京本社よりは、戰時救護材料を送りて、之を陳列し、縱覽に供せしといふ。日本赤十字社は、皇室眷護の下に立ちて、戰時傷病兵を救護するを目的とするものなれど、臣民たるものは、奮ひて、加盟すべきなり。

●藻俵といふもの、生ずれど、豐年の兆なりとて、

古來相慶するものなるが、今年新潟縣下に生じたりとて、縣知事より、宮内省に献納せりといふ。その說明書なりといふは、

藻俵の說明

藻俵は池沼又は水田に生ずる一種の藻草より形成せるものにして其藻草は地方に於て牛笄（ウシコーゲ）又は糸藻と稱するもの若くは松藻と稱するもの等より成ると云ふ其形狀概ね米俵に似たるを以て藻俵と稱す而して大小各同からず献上の二個は就中最大なるものにて概ね小なるもの多し其色は水中にある時は綠色にして乾燥するに隨ひ茶褐色に變す

藻俵は人工に依らず全く天然に成るものにして其形成せる原因を詳にし難し或る說に據れば風波の作用即ち風水面を吹き水波これが爲めに動搖し其作用に因て成れるものと云ふ

信濃川兩岸低濕の地は概ね池沼多きを以て處々に生ぜしことありしと云ふ尤も今年は西蒲原郡大潟より續々發見し今回献納する所に係る二個も亦同潟に生ぜしものなり

三十年前多く藻俵を產せしことあり其後今年の如く多く產せしことなしと云ふ尤も其間少數の產出はありしことありと云へり

藻俵を剖檢すれば米麥又は蟲又は腐植土砂塵芥の類を包有せるものありと云ふ蓋し形成の際各種の物質を混入せしものならんと推測せらる

右藻俵に就ては種々の說をなすものありと雖も概ね齊東野人の說にして信を措き難きもの多し只多く藻俵を產せるは豐年の前兆なりと古來傳說する所にして乃ち今年は必らず豐穰なるべしとて農家一般相慶して喜悅の情眉目に溢る殊に新潟縣は一昨年及昨年未曾有の水害に遭遇し加之蟲害全縣に及び一縣食料の缺乏を來し纔に外國米を仰で生活し殊に小民に至ては困窮其極に達せる境遇なるを以て吉兆を微物に託し豐年を前兆に視す其情意一層切なるが如し其豐年の兆候なるや否やは且らく之を措き災民の愁眉を開くは邦家の爲めに慶賀せざるべけんや

●本居宣長翁墳墓の修理　本居宣長翁は、早く、伊勢山室村、妙樂寺の山に、奧墓を定め、自ら「本居宣長之墓」と書きたる石碑を建て、「山室に千年の春のやとしめと風にしられぬ花をこそ見め」と詠じたりしは、人の知る所なり。爾後、其墓、年々に荒れまさりて、玉垣朽ち、鳥居傾き、たま〳〵人の詣でんとするものは、樵路を攀ぢ、荊棘をひらきて、行かざれど、殆んど道だにもなき、樣なれど有志者之か修補をなさむとて、弘く江湖に義捐を募るといふ。

●島田文學博士

文學博士島田重禮氏、病あり。醫藥手をつくせども、未だ甚だ、快氣に赴かずといふ博士幼時、怙恃を喪ひ、伯姉懷抱顧復の恩を受け、長ずるに及び、伯姉を遇する、所生の如く、奉養二十餘年、實に一日の如くなりき。伯姉歿後、其子孫を撫育すること、三世に及べり。その伯姉の遺族、屢〻産を失ふ。博士家産を竭くして、之を救ひ、その子孫爲めに家名を全うすることを得たり。又伯兄の遺族の爲めに、拮据經營すること極て多し。現にその孫を膝下に招きて、敎養せらる。博士、嘗て、海保漁村翁に從て學べり、然にる、翁及び令嗣竹溪、相尋で鬼籍に上り、たゞ未亡人、及、稚子の存するのみとなれり。已にして、稚子亦歿す。因て、博士、其の家事を經紀すること、二十餘年。翁の忌辰には、必ずその墓に詣して、香華を供す。博士の學、躬行實踐を主とし、名利の念なく、其門生を待つや、至誠を以てし、毫も城郭を設けず。嘗て、塾家を開き、双桂精舍といふ。四方より笈を負て來るもの、數千人、後ち大學敎授と爲るに及び、その塾を閉鎖せしかども尚時々講筵を開き、門生の舊交會、及び、文會等には、必ず出席し、門生の家、吉凶ある毎に、必ず親く慶吊す。故に、門生の博士を視ること、猶父の如し。博士、幼時より書籍の乏きを患へ、常に王白田の語を誦し、曰く、藏書萬卷茅屋三間、我願足ると嘗て困窮の中に在りても、衣食の資を節し、書を購ひ、宋元古槧本を首とし、和漢先儒の遺著に至るまで、大抵藏せざるはなし。大約數萬卷に上る。淸俸の入る所、皆書に代へて、餘す所なし。博士、他の嗜好なし。唯古硏を、愛せりと。物にあるがまゝをか、ゝなむ。

●貞婦讚美歌　彰善會にて、貞婦平井いし女が善行表彰式を行ふべしとは、さきに、前號にくはしくいへりき。その準備など、なほとゝのはぬに期日は延引せり。近きほどには、開會すべしときく。世には、氣ばやく、既に十日の日は擧行せしと報せし新聞もあれど、誤なり。さてその日披露すべき宮中女官方の讚美歌、及、婦人矯風會の唱歌なりといふは、

貞婦平井石女

年をへて人の鏡となりにけりみがきゝし石のひかりは　識子
夫のためつくす誠は人のみか神もあはれとみそなはすらむ　任子
かげきよき平井の水はにごりなき心をうつす鏡とぞなる　文子
にごりなき平井のみつは世の中の人の鏡と見るへかりけり　祥子
この石のかたき心はこがねにも玉にもまさる光なりけり　貞子
眞心の動く時なきためしにはこの石をこそひくへかりけり　敦子
傾しふせやの風をしのぐらむこゝろを石のはしらにはして　道子
千早振神もほとけもまもるらん石よりかたき人のみさをゝ　躬子
夫のためつくす誠の心にはうきもつらきもなき世なりけり　糸子
君がよに顯はれにけりあらかねの土に埋れし石のひかりも　好子
やれ衣身にまへとも賤の女の心のにしきあらはれにけり　鈺子
數つめてもらさぬ石のなかりせば平井の水は涸やはてまし　四子
夫のため身をこになして仕へても心の石はかけじくづれじ　いさを
人傳にきゝても袖をぬらしけりやみふす夫をみとりする樣　三枝子
濁なき平井の水はつまの爲つくすこゝろのかゞみなるらん　愛子
ふたつなき石をはしらてよる光る玉をたからと思ひける哉　歌子

婦人矯風會員唱歌

稱徳歌第二百五十七番あまつましみづの樂譜に合せ歌ふ　（會員家永榮子作）

一 ちりにあくたに　そみはてゝ
あまつひかりも　見ねぬ世に
いもせのみちの　しをりとは
この姫松ぞ　なりにける

二 みやこのにしの　かたほとり
世をわびつゝも　ふる川に
生ひ榮えたる　ひともとの
たかきみさをを　たづぬれば

三 花にたぐへし　妹と背が
むかしは夢と　さめはてゝ
よもぎがやどに　吹きあるゝ
あらしの風に　なやむらん

四 のきばかたぶく　柴のいほ
せこはやまひに　をかされて
むかしのかげも　とめあへず
あはれはかなき　身となりぬ

五なれども雲は　たゆみなく
なつのまひるも　冬の夜も
あるはくさぎり　いさくりて
そのなりはひに　いそしみぬ
六かくて十年の　春秋を
一日のごとく　いたづきて
つくしゝ雲が　まごゝろを
神もあはれと　みそなはし
七人もあはれさ　めではやし
たゝへぬものゝ　なかりけり
かゝるみさをの　のちの世に
ながくつたへて　かたらばや

●孝貞　常陸の國、鹿島郡、太田町に住める小室みつといへるは、姑と、夫とに事へて、孝貞の行おろそかならず。三十餘年一日の如くなるが、こたび知事に聞えしかど、去し十一日、金五圓を賜ひて、賞せられたり。

●孝女　北海道、小樽、眞榮町に住める小林仙造といへるが長女に、きわとて、今年十四歳になれるがあり。家貧しきが上に、父仙藏病にふして、たつきを失ひ、かまどの煙もたてかねるに、きわ女は、日々路、蕨などをとりては、市にひさぎ、その代を得て、二人の口を糊し、さて晝夜看護に怠りなしといふ。小樽の警察署にては、之をあはれみ、救助の方法をその支廳に協議せりときく。あはれなるものもあるなり。

●貞婦　これも北海道、石狩國、上川郡、永山村の渡邊しきといへるは、數年前、夫にげうせて、行方をしらず。しかもよく勤儉を守りて、家を治め、子女の養育におこたりなしといふ。北海道廳長官これを聞きて、物を賜ひて、之を賞せりとぞ。

●又　熊本縣肥後國、菊池郡、城北村、士族、鶴田吉郎が妻、星子門司子(五十八歳)は、士族星子傳が娘なり。夫の吉郎、明治廿二年より、中風病にて

臥床にあること、十年間、一日のごとく、看病の手厚きふるまひをも、稱揚せざるものなかりしが、ことしの二月、吉郎、六十九歳にて、病死せり。婦人のかなしみは、おしてしるべし。亦、家庭の教育に心をもちひし婦人にて、長男を鶴田直といふ。熊本縣尋常中學、濟々黌、城北分黌の漢學科の教員となれり。實に、此の母ありて、此の子ありといふべきなり。(非芹五十八子報)

●節婦　世には、身ひくからず、親も子も、夫をも持ちながら、われを忘れ、操をはふらかして、あらぬふるまひするものあり。ましてひくき際にはをり〳〵きこゆることなりかし。さるを、今この節婦身は高からねども、操高く、潔きこと、今の世にはいとまれなり、福島縣、郡山町、字淺中場四番地に住む勅使原鉄七郎か妻、さくといへるは、もと埼玉縣、秩父郡、下吉田村、字櫻木といふところの人なり。數年前、この鉄七郎に嫁して、今年廿一歳になれり。鉄七郎、魚をひさぐを業として、家にあること少く、さく女みめうるはしけれど、あだなる戀をするものも多かれど、さく女操いよ〳〵かたく、行いよ〳〵正しきに、皆、徒に心をこかすのみなりき。さるを去し廿五日といふに、同じ家つゝきに住める、しれもの松谷某とて、今年廿歳なるが、夫鉄七郎の外出をうかゝひ、ひそかにしのび入りて日ごろ切に戀ふるよしをいひくどけども、さく女ふつになびかず。今はとて、強ちにさく女をはづかしめて、逃げされり、さく女かぎりなく口惜しくて、直に遺書一通をのこして、刄物をもて、みつから貫きて身うせたりといふ。その遺書、文辭たど〳〵しかれども、眞情見る如し。今、原元のまゝを揚くれ

ぞ、

かきをきのこと

をまいさんのるすくらさんに○○○されていしのかをいぞろをなぶりまことにもうしわけもありませんたゞしはせけんのがいぶんわろしたゞべん〳〵といきてはいられませんからかくのしたいでございます

五月廿五日　　　でしがわらさくより

●孝子　讚州、三野郡の人、川崎嘉造といへるぞ、孝順のきこゑたかく、ろの母は、今より十三年以前長病の後みうせ、父は惡疾をわづらひて、明を失へり。家貧しく、父、甚、酒を嗜むに、自ら酒を絶ちて、之を父にさゝげ、十有餘年の間、孝養怠るりとなし。こたび、縣知事より賞として金員を賜れり

●福岡縣の人、半田萬市といへるは、父母老衰えたるに、事へて、至孝をつくし、晝は石油を行商し、夜は、みづから薪水の勞をとり、勤儉を旨として、遂に家産を起せり。これも縣知事に聞ゑて、金を賜はりて賞せらる。●栃木縣下にゝ兄弟の孝子あり。其の父、病にふして、いぞれもれるに、二人までゝろをつくして、全愈を神佛に祈る。近郷感ぜざるはなしといふ。

●悌愛　仙臺市尋常中學校生徒、澤邊哲彥といへるは、幼きほどに、父にわかれ、兄弟七人あり。家は貧しくして、學資を給するに道なく、みづから朝毎に牛乳の配達をして、その賃を得て、おのれのみか、弟妹どもまでの學資に充つるに、櫻井勘助父子之をあはれみて、をり〳〵金品を贈りて、其の志をはげますといふ。同じ仙臺市にて、高等女學校、師範學校女子部等に怪聞あるが中にかゝるもあり女

生徒之をきゝて、顔色あるか、否か。

●舊誼を忘れず、難を救ひ、究をたすくるは美事なり。京都市、高臺寺門前、下河原町に住める永松信民(今年十七歳)が祖父に、信孝とて、今年八十七歳になれるがあり。もとは、舊彦根藩臣にして、弘化年中、江戸、芝白金に住みて、和學の教授をせし幕臣東條星洞が高弟なり。當時、信孝の門より出でて、名を知られたる學者もすくなからず。はじめ信孝、麴町區飯田町、中阪下に住めりしが、去し明治廿五年六月といふに、今の京都に移りすめり。後、廿八年中、子息某は、病みてみうせしかば、今は未亡人某孫の信民と三人にて、煙ほそくも日を送れり。こゝに、東京、本郷、眞砂町に住める島崎某(今年廿五歳)といへるは、もと信孝が東京にありしほとに、門弟たりし人にて、妻某(今年十九歳)は下谷根岸に住める木澤某とて、昔、かの星洞が門弟にして、信孝とは、同門の好ある人の孫なり。この二人、去し三月の頃、京都に至りて、信孝がり、おとづれしかば、信孝も久しくて、あひしを喜びけり。二人は、其の貧しくて、昔のさまに似ぬをいたはしく思ひて、手土産に添へて、金子拾圓を贈り、さて歸りて後、かの木澤の老祖母にこのさまをかたりしかば、老祖母も、舊誼を忘れず、之をあはれがりて、人をつかはして、金二百圓と、外に種々のものとを贈れり。信孝之を受けて、その厚情に感じて涙にむせびしといふ。(吉田新作氏の通信に依る)朝には、斷金の交を結びて、夕には、相敵視し、昨日の師弟も、今日は、路傍の人の如きものもあるが中に、いとめでたき美談にこそ。

●童顔の老翁　仙臺市に住める某といへるは、

今年九十二歳にして、妻は八十二歳なり。顔かたち年にはにず若やかにて身もすこやかなり。孫卅四人、玄孫一人ありといふ。せまほしきはながいきなり。

●講習會　富山縣師範學校にては、各郡市より、女教員各一名をよびいでゝ、洗濯、染彩等を講習せしむといふ。教員などになれど、みづからたかぶりて、これらの業をするを快とせざるもの多かめるに、これは、よくもせられたり。

●高島呑象　は、嘉右衛門氏の號なり。このごろ、北海道よりの歸途、盛岡の高等女學校にたちよりて、一場の講話をせられたりといふ。

●女生徒の演劇ときかぞ、世に怪まぬものはなかるべし。はた爪はじきして賤めぬものなかるべし。さきには、新潟縣師範學校に、男生徒の演劇ありて、いたく世のそしりを受けたりき。これにも鑑るべきに、更に歩をすゝめて、その覆轍をふむ。抑、何の心ぞや。まして、女生徒たるをや。去し廿八日の地久節を祝せんとて、仙臺高等女學校生徒等は、賤しき俳優のよそほひして、櫻井、小督、看護婦、高砂、業平、道風、伊勢、重盛等の所作を演せしに、教職員等、喝采して、之をほめたるを、師範學校女子部の生徒等も、亦、まけじがはに、校内にて、演劇をして、互に技をきそひしといふ。これら皆、餘興にとて、演じたりしならん。さるを、今、きけど、先、興さめて、言ひいでん言葉もしらず。この職員にして、この生徒あり。嗚呼。

●新領地の女子教育　臺灣の教育事業は、我等内地人の重任なり。その男子の教育は、漸、歩をすゝむれども、女子に至りては、微々として振はず、當

今、女學校は、濟南に、西洋人の設立せしものと、總督府にて、着手せし一二の學校あるに過ぎず。元來、當地、中流以下にしては、女子の成長するを待ちて、若干の價に代へて、賣却するを常とし、一部の財産たる觀ありて、却りて、その教育を拒む風あり。されど、この事業は、最、困難にして、苦辛經營を要すべきこと多しといふ。

●上海の女學校　王康年といへるが、之を設立せんとて、その計畫いよ／＼進めりといふ。成功せさせまほしきものなり。

●萬國婦人教育會　を米國コロラド府にて、開會すといふにて、我が國よりは、津田梅子、渡邊筆子を派遣し、すでに去し三日東京を出發せりといふ。さて、又、この二氏は、文部省よりは、米國高等教育の視察、華族女學校よりは、同國普通教育の視察を、囑托せられたりといふ。

●赤痢病豫防歌　といふものあり。某衞生協會にての作なりといふ。もとより常識ある際はいはず。くらきがちなる女童、さては避病院にいれらるゝを、棄てらるゝと思ひ、醫藥を毒藥と思ひゝがめるものまでも、會得せしめんには、いとよき思ひつきなり。

一ツトヤー人々身體を大切にし　赤痢に罹らぬ御用心／＼

二ツトヤー不熟の菓物食すれど／＼　腸胃の工合を惡くする／＼

三ツトヤー水をぞ生水て飲む勿れ／＼　煮立て冷却した後にせよ／＼

四ツトヤー夜間は寢冷をせぬ様に／＼　腹掛腰巻しめて寢よ／＼

五ットヤー井戸端雪隱流し下〳〵
　清潔にするのが肝要ぞ〳〵
六ットヤー間食不時食愼しみて〳〵
　過飲過食せぬ樣に〳〵
七ットヤー可及的食事の器具をも〳〵
　煮沸水にて洗ふべし〳〵
八ットヤー旅人宿に料理屋寄席芝居〳〵
　厠の消毒たのむぞや〳〵
九ットヤー子供の水泳び遠遊び〳〵
　買喰するのを嚴戒よ〳〵
十トヤー隣家や近所に遠慮せず〳〵
　赤痢の徴候なら屆出よ〳〵
十一トヤー一々豫防の命令を〳〵
　實行は身の爲め人の爲め〳〵
十二トヤー日々働き垢染た〳〵
　着物の洗濯等閑な〳〵
十三トヤー三度の食事に氣を附て〳〵
　消化の善良食品撰ふべし〳〵
十四トヤー始終屋内を掃除して
　空氣の流通を能くすべし
十五トヤー塵埃をも蓄積ずに燒棄て〳〵
　家屋の周圍を清潔に〳〵
十六トヤー碌々に醫者に見せもせず〳〵
　隱蔽して重らす阿房者〳〵
十七トヤー死地に入れらる心地して〳〵
　避病舍嫌がる氣の知れぬ〳〵
十八トヤー蠅類は病毒をも傳播ぶ〳〵
　必ず食器に被蓋をせよ〳〵
十九トヤー下痢病には裡急后重〳〵
　直樣に醫者に見て貰へ〳〵

二十トヤー時節柄をも辨へて〳〵
豫防に消毒怠るな〳〵

●帝國慈善會　といふを設立せんとて、大川巽、福室奥太郎、宇田川銀之助等、發起人となりて、既に、其の筋へも出願せしといふ。目的はいふも更なれど、まづ、天災、地變にかゝり、或は父母妻子にわかれ、或は、土地財産を失ひて、活路にふみ迷ふもの、さては、數年疾病のために、極貧にたちいり父母兄弟に後れて、たよるべき處なき孤兒などを救助するなりとぞ。これが爲に、廣く寄附金を募集するといふ世の紳士淑女、かのむかし雪の日に、わか衣をぬぎて、あはれなる乞兒にあたへし一少女をおもへ。「博愛衆に及ぼす」は、かしこかれども、我が皇の大御心ならずや。

●慈善　鳥取縣の人、醫師矢野某といへるはおのが結婚式にあつべき費用を節して、貧しき人どもを救へりときく。善哉

●旅のいましめ　さきには、汽車にて、相州馬入川の鐵橋を渡るとき、その窓より、景色みんとて、さしのぞきしが、折ふし行き違ふ汽車にふれて、大傷をうけし人あり。今又、伊州、桑名町の某といへる婦人、木曾川の鐵橋を渡るとて、わが子を抱きあげて、汽車の窓より、のぞかしめんして、過ちて流の最中におとしぬとぞ。旅する人は心すべし。

●流行　の風俗には、よきもあるが中に、二三年以前よりのに、いと醜きがあり。かの十七八歳より廿歳前後の女子、帶を高く、ひきあげて、胸中にきびしくまきつけ、更に、帶あげといふものにて、つりあげたり、これは、胸腔をせばめ、内臓のはたらきをにぶからしめ、身体の發達を妨ぐるのみか、

小さき爵も一ときは高く見えて、いと醜し。さても、しかせでは、流行後るゝとてや、競ひて、この醜に赴むくもの多きは、うたてきわざならずや。

●女學雜誌を弔ふ　惜しきかな、女學雜誌。(岩本善次氏担當)女には、似つかはしからぬ筆鋒を弄ひて、時に或は、氣焔萬丈、正眼には、のぞむべからざることも井端會議の議長も、さこそと、思はるゝこともあり。今その第四百六十六號の記事には、餘りに巾をきかせ過ぐして、出版法第二條の範圍外に亘れることありとて、去し十五日出版を差止らる。由來お轉婆婦は、とかくに轉び勝なり。年は老いて心がまへは、わかき老婦、今は、をしき一命を法の刄におとす。嗚呼惜哉。其の靈や、高く天には、とゞまらずして、とくまた、この世に生れいでよ。

●女人隊　我が國にても、近くは、西南戰爭。古くは、維新以前には、婦女子にして、戰場に赴きしもすくなからず。この近きほど、米國と西班牙と兵を構ふるに、その米國のペンシルバニヤの婦女子隊を組みて日毎に兵を練ると聞く。男子は天性おのづから勇壯にして、女子の之に反するは、何處もおなじかるべし。軍隊組織の全からざりし昔ならしらず當今の世にしては、輕操のそしりを免れざるべし。女子自ら戟を取らでも、他に適當にして、急務とすべきがあるべきに。自ら文明國とほこるなる國にしては、軍事をも、心やすく男子には、うちまかせ難きにや。かくの如くにして。今一歩、その所謂、文明の進步せむ、男女全く位置を異にし、男子は家にありて子女鞠育の任にあたり、遠征の婦女子の凱旋を待つにも至らんか。これ果して如何。

投書

●禮節は手易きものにや

有住教場にて禮節學ぶ女の童

なにがし

いつの頃にかありけん、我たのみたる學びの場にとひきしに人ありけり、禮節のことを學ばんとて一日二日三日四日なん學びたりけり、その人ものもうつしゆきにけりとかや、されど深くは學びおへざりけり。いかに去たりけん、しばしありてたともせずなりぬ。さみだれぐもの、いとたはゝしくうちたはひそめぬ。るに、ふみよみさして、世の中のことを人のかたらふにみゝとゞめたるに、こたみ禮節のことをしふるに、家庭の敎へ、禮式、熨斗、結物、婚禮式と五課目にわかちてひとつを、三十日がほどにて、よくをしへなすとぞいへるなどいふに、こはあやしきことかな、この童はみとせ四年がほど習ひいそしみたるに、いま一課目もよくはをさめおへず、いかにしてと思ひあやしまるゝものから、そはいつらのすぐれびとの設けたる教場にやと、とひいでつるに、こをとて一枚の紙を取出しよみいつるやう、

夫禮式の人世必要なるは古今定儀にして皆人の之を知る處なり語曰く天生民を降すときは是に與ふるに仁義禮智信の性を以てせすといふとなしと至れる哉言や禮は夫れ人道の一大要務にして心形共に連綿離るへからざるの訓なり然り而して無形の情禮を顯揚せんと欲せは先つ有形の法式を學習せすんはある可らず然るに世人或は思へらく禮式は尊大奢靡の弊を搆造すると謬解し又甚しと云ふへし夫禮式は節儉を旨とし聽言動其宜を得せしめ固有の良心を發達し人の人たる其道を知らしむるにあり何ぞ尊大奢靡の弊を來さんや今夫良匠かいかに精功を極めんと欲するも規繩なくして調理の妙を得るものは未た之あらさるなり余は夙に斯事に熱心し畧左記の條目移轉教授の方法を設け子女學習の便宜を得せしめんと欲す故に江湖の諸彦余か微衷を贊成し地方の子女を誘導せられ陸續來習あらんことを希望に堪へさるなり

明治三十年　月　日　　中島義弌

○家庭の教課目

- 一人倫五常
- 一女子の要旨
- 一皇恩
- 一女子三從の道
- 一女子の五辭
- 一禮の精神
- 一女子の本分
- 一孝道
- 一女子四行
- 一女子六德

一女子の七辭
一女子平常心得
一主婦責任の大綱
一客の送迎心得

〇禮式條目

一動作心得之事
一襖開閉之事
一烟草盆進様之事
一小刀進様之事
一諸状類進様之事
一汲茶進様之事
一吸物膳進様之事
一給仕之事
一喰事方之事
一徳利取扱之事
一立ながら書物進様之事
一坐蒲團進様並用方の事
一壹汁三菜、汁三菜の事
一白紙鼻紙等進様の事
一夜具取扱の事
一麵類喰方の事
一神佛へ花供する事
一客の送迎への事
一立禮大概の事
一拜賀式の事
一高月取扱の事
一掛物取扱の事
一三ツ盃銚子取扱の事
一小學生徒心得
一嫁婦の心得
一貞烈
一接客に就ての注意
一坐拜上中下之事
一火鉢進様之事
一香物進様之事
一團扇進様之事
一硯箱進様之事
一菓子進様之事
一本膳進様之事
一湯桶取扱様之事
一海川魚進様之事
一誂書受様之事
一盃類帽手燭提燈等進様之事
一二の膳三の膳の事
一のし三寳取扱の事
一手水進様の事
一袴小袖類進様の事
一碁將棊盤進様の事
一幅もの書物式紙短冊挿花其他器物見様の事
一三手造り手ながの事
一道別れ道連心得の事
一天目取扱の事
一扇子取扱の事
一屏風取扱の事
一狹ミ肴の事

〇熨斗

一折方　百通り

〇結　物

一結物紐留め百通り

〇婚禮式

一大概之事

右五課目中一課目望みの者は三十日間に教授す

とよみをはりて、

かゝる事も世にあなり、いまし童の如くれそれそしく物習ふこそとてうちゑむさまなり、うちみるに、こは今の世の物にはあらざんめり、享和年間の書より抜出たるにやあらん、熨斗とは器の名なるに、心ねぬことかな、婚禮式のことをとみに習ひねんことも、とうちかたぶかるゝに、かたはらの人、なはうちゑみてやまざりけり、このかみのれもてに、明治三十年とあんなるそくすしききはみかな、かみのれもの詞は五六十年七八十年前のこととうできなく思はるもいと〳〵あやしかりけり。



教の庭

六月廿日兼題　軍人

天　伊豫國松山市一番町　宇高まつ子

君のため散るを惜まぬものゝふの
こゝろの花ぞめでたかりける

地　横濱市木町　綿野りき子

動きなき御代のかためと仰ぐかな
實に勇ましきものゝふのとも

人　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

君か爲とりはく太刀のつかのまも
心ゆるさぬものゝふのとも

秀逸　（二十首）

國のためしこのみたてと献す身は　堤彬子
香はしき名の世にのこるらん

事しあらは家をも身をもうちすてゝ　田代艶子
御國につくすあはれますらを

大君のみたてとなりてたけき名を　佐々有鄰子
雲井にあぐるいくさびとかな

あつさゆみ引きてかへらぬ武士の　尾立富子
まことぞ國のはしらなりける

玉よりもなほたふとしや國のため　秋月よし子
みがく武夫のやまとごゝろは

くろかねのかたきをおのか心にて　熊谷たい子
ゆめなたゆみそものゝふの道

山をぬき海をうつむるますらをの　赤羽もと子
ちからぞ國のかためなりける

大君にいのちさゝけてますらをの　石見豊子
御國につくすいさをたかしも

やまさくら匂ふか如きものゝふの　内本道子
やまとごゝろの清くもある哉

大君にさゝけしいのちなにならず　遠藤良久子
つるぎのはやし丸のあられも

君のため國のためにはみをすてゝ　岡田陽子
ますらたけをのなにな背きそ

盾となり城となるなりもの丶ふの
君とくにとにつくすこ丶ろは　佐久間八重子

れは鑿のか丶なく磐もきこゆなり
利こ丶ろ勝けますらをのとも　三幣みさを子

もの丶ふは治まる代にも磨くらん
神世なからのやまとこ丶ろを　澁谷うの子

君かためつくさんわさは多かれと
みいくさ人にしくものそなき　春永巳己子

大君の御代やすかれといくさびと
をさまれる世も大刀みがく哉　福原菫子

大君の御たてとなりてもの丶ふは
朽ぬその名を代々にとめなん　金森俊子

外國にたくひあらじな𛀁きしまの
やまと島根のもの丶ふのとも　山崎𛀁づ子

いくさ人きみに捧けしいのちこそ
すめらみ國のまもりなりけれ　日高かず子

山さくら清きいろかにたくひつ丶
こ丶ろ雄々しきいくさ人かな　錦織幸子

かしこくも國のまもりさなるからに
かろきはつれにいのちなりけり　濱口貞子

國のためいのちをしまぬますらをの
いさをはひさのかゞみなりけり　中山さみ子

もののふはかはれを野へに露すとも
その名はくちし千代に八千代に　石井豐子

治まれる代とはいへともいくさひと
こゝろのつるきとかぬ日そなき　高井孟子

ことしあらは千名の五百名を萬代の
すゑまてのこせこれのますらを　野口信子

たくひなきわか日の本のいくさひと
もてるこゝろのいさましきかな　田代綾子

夢のまゝけふりのうちさおもふらん
たまをまくらにくにまもる身は　樋野りよう子

かちときの聲を雲ゐにきこえあけて
すかたをゝしきいくさひとかな　佐々小琴子

もの丶ふの君につくせるまこゝろは
わかひのもとのひかりなりけり　佐々敏子

かへらしとこゝろ定めてもの丶ふの
みくにのために身をつくすらん　谷口なほ子

舟くろまやすく行くよもものゝふの
たさろこゝろはかはらさりけり　奈賀井満梨子

おほきみにさゝけまつりし我身はも
つゆときえてもなにかいさはん　須藤さく子

見るからにこゝろいさましいくさ人
あさひににほふはなにたくひて　竹村竹里子

ものゝふのいのちを露とあらそひて
まことこゝろをさゝけつるかな　輕部壽子

なさまれる御代のまもりのいくさ人
こゝろゆるすなかたときのまも　三井しん子

あつさ弓ひきかへさしとますらをか
たつるいさをそをゝしかりける　徳永萬壽子

もろこしにかはれうつめしいくさ人
いさをは千代もくちせさらまし　高島壽子

あつさ弓ひきてかへらぬ眞こゝろを
たてとしすゝめますらをのとも　林治子

くにのため家をもみをもわすれてそ
やまとたけをとひとはいふなる　横山柳子

君か代は千代に八千代にやすかれと
いのちをしますまもるものゝふ　畠山百合子

君のためくにのためにはふたつなき
いのちをしまぬもののふのとも　畠山千代子

わたつみの底のもくつとことたてて
みくにゝつくすもののふのみち　富士村茂子

ことゝ國のつゆときゆともやまさくら
あさひにゝほふ名をはとゝめよ　中澤千野子

もののふの任れは野山にくちぬとも
そのなはこけのしたにかくれす　山根久子

動きなきくにのまもりとなるものは
わかひのもとのいくさひとかな　萩原章子

國のためいのちをしまぬますらをの
いさをはむれにかゝやきにけり　清水すみ子

大きみにいのちさゝけてかはらとも
おもはぬ身こそたまにまさらめ　壺井みき子

こゝにあらは御國のためにすゝみいて
わかおほきみをまもるもののふ　玉井隆子

國のためきみのためとてもののふは
いへをもみをもかへりみぬかな　藤村たみ子

よしや身は露と消ゆともをしからし
かくはしき名の千代にのこれは　大熊つれ子

ますらをの高くさゝけてうつつゝは
やかてほまれのひゞきとそなる　大熊よう子

しきしまの大和こころはもののふの
あかきこころにあらはれにけり　加邊留子

國のためつゆときゆともものゝふの
あかきこゝろは千代も朽ちせし　久萬龜子

ものゝふの赤きこころはやまさくら
散りてそはなのほはありける　石井信惠子

かれてより身をはなします國のため
ますらたけをかつくしぬるかな　木村きく子

國のためかはれはのへにさらすとも
千代八千代まて名をのこさはや　磯部しう子

神代よりいまにいたるもかはらぬは
我かものゝふのこころなりけり　田中りか子

勇ましきいくさならしのさま見れは
けにもの〻ふにしくものそなき　西[illegible]子

しきしまのをのこの道をひとすちに
つかふるきみのいさましきかな　佐藤喜代子

しきしまの國のはしらとたのむなり
たけくいさめるますらをのとも　橋　直子

きみのためみくにの爲にたらちれは
散れよとうゐしますらをのはな　梅園ふみ子

海ゆかはやまゆかはとてもの〻ふの
うたふこ〻ろにあたやなからん　笹子茂子

千代八千代よろづよかけてかくはしき
名をとゞむるはもの〻ふのみち　田中廣子

雨よりもなほふりまさるたまをたに
なにかいとはんもの〻夫のみは　山内篤子

もの〻夫の高きほまれはなか〳〵に
死すとも消ねしやまとたましひ　荒井しも子

虎ほゆる野邊にかはねをすて〻こそ
かくはしき名は世にのこりけれ　折田さい子

ひと聲のもとにあしなみそろひつ〻
す〻むみさをのいさましきかな　折本のぶ子

つ〻されはひともわか身も忘れけり
これやまとのやまさくらはな　小川愛子

つ〻まくらさゆるしも夜にみし月は
むれにか〻やくたまとこそなれ　久間春子

木つ〻もて遊ぶを見れはをさな子も
みいくさひとやかれてしたへる　須磨純子

國のためきみのみたてとなる身こそ
やまとをのこのほまれなりけれ　岡里富子

事しあらは御國のためにつまや子を
すて〻もつくすやまとますらを　竹村貞子

國をおもひきみにつかふるまこ〻ろの
よにたくひなきやまとますらを　河田いし子

千萬のあたもたやすくことむけん
ますらたけをそたのもしかりける　湊谷きよ子

國のためみをもをしますますらをの
つくすこ〻ろのあはれなるかな　能登くめ子

君のためほつ〻のたまのなかすらも
さけすす〻まんたけををゝしも　湊谷いく子

みいくさを納めてかへるもの〻ふの
名はとつくにゝとゞろきにけり　佐々木はつ子

ちよろつの筒をそろへていで立ちし
みいくさひとのいさましきかな　前田たけ子

高き名をちよにつたへよもの〻ふか
みかくつるきもきみのためには　遠藤雪子

うみやまにかはねを捨つるますらをの
さもこそ御代のたからなりけれ　林　學子

時しあらはいのちを捨て〻おほきみの
みためとそなるますらをの身は　齋藤せん子

君のためいのちをしまぬものゝふの
　こゞろぞくにのまもりなりける　武田粲子

亊あらば引きてかへさぬものゝふの
　こゝろぞくにのたてとなるらん　北村弘子

君がためいのちをしまぬつはものゝ
　こゝろはくにのたからなりける　橋本さは子

ものゝ夫はつま子のことを返り見す
　たゞきみのためつくせまこゝろ　橋本さよ子

お保君にみをさゝけつゝすめらぎの
　くにやすかれとまもるものゝふ　三好梨花子

ことしあらば山もぬかんのちからもて
　ますらをのこぞくにまもるなる　大坪修子

たとへ身はあれ野の露と消ぬとも
　こゝろはくにをまもらざらめや　山田玉枝子

ものゝふは名をこそ殘せけものすら
　かはをとゞむるならひある世に　山田琼子

たとへ身はしこ野の露と消ぬとも
　その名を千代にのこせますらを　廣田さめ子

いさましきすがたなりけりいくさ人
　いさをのしるしむれにかゝけて　仁保しま子

ものゝふの赤きこゝろのあらはれて
　くにはやすけくをさまれるなり　加藤さく子

よしや身はみつくかばねとなりぬとも
　うみのそこまで名をはのこさん　平野しづ子

劍たちはきて出て立つますらをの
　とものすがたのいさましきかな　三谷きみ子

國のためきみがためにとますらをが
　いのちをしまぬこゝろうれしき　大槻薫子

玉の緒のあらんかぎりはいくさびと
　きみにつかふるみちはわすれし　大槻玉城子

忠とはた孝をかしらにいたゞきて
　みくにゝつくすますらをのとも　青木たま子

やすらけくくにをまもれやこと國に
　またたぐひなきやまとますら男　諸井久眞子

いは清水ながれのすゑにすむたみは
　いくさのみちもかしこかりけり　吾妻ちか子

たぐひなきすめらみくにのいくさ人
　きみをまもれややまとこゝろに　中桐杏子

お保君のたふときみことかしこみて
　くにやすかれとまもるものゝふ　池谷富子

くにのため君につかふるまごゝろも
　いくさのにはにみゆるますらを　紺脇よす子

さしのぼる我が日の本のいくさびと
　ほまれはたかく世にひゞくらむ　柳田里子

君のためくにのためとてものゝふの
　ことあらん日をまつぞたふとき　迫水信子

あらしをもいとはでむかふ山ざくら
　ちりてもはなの名・こそくちせに　高橋かね子

おほ君のみいつのもとにまつろはぬ
しこのあらし雄うちこらしてん　田中みつ子

しらま弓ひく手たけくとものゝふの
こゝろはくにのしつめなるらん　成瀬朝子

ことしあらは命をすてむますらをは
をさまれる代もたからなりけり　杉山みどり子

事しあらは返りみせすていそしむそ
ますらたけをのこゝろなりける　野中朝子

そひらには玉はうけしとてきのうつ
つゝをおそれすむかふますらを　下元もと子

死ぬとてもうしろは見せぬいくさ人
みくにのためとあふかるゝかな　清水秀子

君のためいのちすつとももののふの
その名はくちす千代にのこらむ　由井なみ子

君のためつくすまことのおもくして
いのちはかろきいくさひとかな　由井すみ子

ものゝふと數まへらるゝ身にあれは
くにゝつくさんやまとこゝろを　濱とみ子

みいくさにたかいまなしの見ゆる哉
こかれかゞやくむれのしるしに　森こと子

ますらをの高きいさをに日の御はた
とつくにまてもかゞやかしけり　白石梅子

ますらをはことある時そかへりみす
君とくにとに身をさゝくへき　近藤よし子

あつさ弓ひきてかへらぬこゝろをは
いろとはせよやまとますらを　並木春子

たぐひなきくにのひかりを外つ國に
かゞやかしたるやまとますらを　林久子

ものゝふかこゝろあらはす日のみ旗
とつくにまてもかゞやきてけり　平野晴江子

日の本のくにをまもれるつはものゝ
こゝろのみちそいさましきかな　熊田艶子

つるきたち大和こゝろもみかきつゝ
かみよながらの名をなけかしそ　林あさ子

海の外にかゝやきわたるひのみはた
こやますらをのこゝろなりけり　絹川滿壽惠子

ものゝふはなつとふゆとの厭ひなく
すめらみくにをまもりつるかな　高屋はきの子

あきらけき御代にあひてそ賤の男も
みくにをまもるかすに入りける　谷口ふさ子

國のためいのちをしまぬますら夫は
わが日のもとの花にそありける　美濃君子

大きみのまけのまに〳〵身をすてゝ
くにをまもるそものゝふのみち　山崎つき子

おほきみのみたてと仰くものゝふの
つゆわすれぬはやまとたましひ　阿保松子

しきしまのやまとの國のひかりこそ
ますらたけをのほまれなりけれ　宇高靜子

君のためいのちをしまぬいくさひさ
おにかみさてもなにかおそれん　仲田しけ子

あかねさす朝日にゝほふさくらはな
こゝろはおなしやまさものゝふ　中田豐子

國のためいくさする身はたやおもふ
いさまたになきならひなりけり　目黑佐喜子

きみかためかはれはのへに謡すさも
いさをたてよあはれものゝふ　住山幾子

君のためくにのためさてますらをか
たつるいさをそいさましきかな　靜川千歳子

惜からしきみまたくにのためならは
やたまに身をはうちすてぬさも　小松靜子

くにのため散るも散らぬもさくら花
つくすこゝろのいろはかはらし　服部かつみ子

君かよはあたやはあらんあらすさて
やすくすくへきいくさひさかは　齋藤よし子

いさき云はゞ君のみたてさ立いてゝ
みくにをまもろやまさますらを　浦井淸子

ものゝふの世になかりせは大きみの
みいつもそさにかゝやかさらん　浦井豐子

ものゝふのみ國につくすまこゝろは
むかしもいまもかはらさりけり　春野梅子

くたけてもひかりはのこせいくさ人
にしきをつゝむやまさたまのを　吹田たけ子

いのちよりなこそ惜けれものゝふの
みちひさすちにつくせますらを　竹村ふで子

いくさ人立てしひさつのいさをこそ
むれのしろしにあらはれにけれ　四元昭子

大きみにいのちさゝけてますらをか
たつるいさをは千代にくちせし　高石さ代子

こさしあらはわか身をすてゝ大君の
御くにのためにつくすますら夫　妹尾よし子

お匠君のみたてさなりてますらをの
ひはなをちらす名こそたかけれ　泉さい子

お匠きみのみいくさひさに讃まれて
賊らはねあろ世にこそありけれ　泉いし子

事しあれはきみかみたてさいくさ人
あらぬなりにもいさましきかな　泉久眞子

あつさ弓ひきかへさしさものゝふの
かたきこゝろそ身のたからなる　北島功子

かへらしさちかひてたちしいくさ人
くにのかゝみさなりにけるかな　北島松子

身は筒のけふりさきねていさをしの
たかきそのなをのこすますらを　迫廣八重子

六月廿日兼題　官位昇進を祝する文

天　筑前國筑紫郡住吉村春吉五番町　林　久子

都にのぼらせたまひしは、きのふ今日のやうにて、いまだ一年にもならせたまはざるに、いとはやも御官位すゝませたまひ、やんごとなきかた〲と共に、外國に赴かせたまふとて、こたび御國に歸らせたまひしよし、かねて御職務の上に、御心いれたまふよしは、承り侍りしかど、げに御學の力によるならんかし。されど御みはいふもさらなり、御家のほまれと、ほきまつるになん。とし老いたまへる御親たちの御よろこびも、さぞかしとおもひはかり侍りてなん。明日は、とく參りて、よろづきこゆべけれど、いそぎ、文もてほきことのみ。かくなん、あなかしこ。

地　東京芝區高輪北町　仁瓶邦子

久々おとづれも仕らず候ひし處、皆々樣御機嫌よう御揃ひ遊はし候段、御めでたく存じ奉り候、承れば、御子息樣には、此度特別の御昇進遊ばされ、其の上、勳章をも頂戴被成候由、昨日の官報にて拜見致し、陰ながら御祝ひ申上候、これ平素公務の爲め御精勵遊ばされし功と、實に感服仕候、定めし御當人樣は申すに及ばず、御家内皆々樣、御滿足に入らせられ候事と奉存候、猶以後國家の爲め、益々御勵務の程、御祈り申上候、先は御祝ひ傍々、此後の希望迄、此の如くに御座候あら〲かしこ。

人　越前國敦賀町[illegible]寄留久間有隣長女　久間春子

きぬもて包む玉は、自然と其の光あらはるゝとか。君には、平素溫良恭儉にして、よく人を愛し、おのづから彼の紫のいろなつかしき、風采をとり給ひたれど、師の君とも、姉の君とも、仰ぎまゐらせしに、公家にても、はやう、目ざゝせ給ひ、さいつ年、おく深き雲井の庭に召させ給ひしより、君の御ためには、こよなき御ことながら、我が同士は、女德の鏡に、はなれたるこゝちして、年月を送り侍りぬるに、こたび又、官すゝませ給ひ、位さへそはせ給ひしよし、もとの交り忘れ給はで、おりとも忘られぬ野邊の下草の、妾らまで、仰せおこせ給ふことの嬉しさ、我が身のことにもまさりてなむ。げに、玉の光のまほに見えたらむよりも、きぬを透りてにほひ出で、霞の中の櫻花の、ほのかにいろ香見せたるは、おくかぎりなく、なつかしさもそはり侍れど、君の女德ざ

ねのはせも、かくぞ見させ給ひつらむと、思ひやりまゐらせ侍りぬ。されど、なほ此の上にも、つぎつぎに官も位も進み給はむこと、今より見る如し。師と仰ぎ、姉とたのみまゐらせし君の、かくかしこき御わたり近くまで、つかさよざゝれ給ふは、妾等にも亦いみじき面目なれど、この後は、殊に御身をいたはり、すくよかに務めいそしみ給はむことをのみ、願ぎまゐらせ侍りぬ。さては、いと〳〵なめげに侍れど、この國にて調じたる、羽二重二かさね參らせ侍りぬ、御下着の料にもせさせ給はゞ、いといとうれしくなむ思ひ給ふる。又御里下りのをりもあらむには、必ず仰せしらせ給はらむや、御いとまのひまはなくとも、御敎へ願ぎたきことゞも多く積れゝどなむ。まづは、うれしさのあまり、御ことほぎ聞え參らせ侍らむとて、拙き筆をもかへりみず。かくなむ。あなかしこ。

（以下原稿到着順）

佐々敏子

承れば伯父君様には、これまで少尉御勤務の處、此度中尉に御昇進の御事、まことにうれしう存じまゐらせ候、これ常々御精勵の御いさをしの譽はれしものなれば、御自身の御名譽のみならず、御祖父様御祖母様の御よろこび、いかばかりならんと、推しはかりまゐらするになん。さて申すまでもなきことながら、御國の御ため、いよ〳〵御精勵あそばさんことを、ねぎまつるになん。なほ御祖父様御祖母様には、一日千秋の思ひにて、御歸鄕を御待ちあれば休暇を賜はりしならば歸鄕ありて老人方の御心をやすめまつらん事こそねがはしうなん。先は御祝ひまでかしこ、

西[illegible]子

承りまつれば、御令息様御事、日頃の御いそしみにより、今度、御官位御榮進遊ばされ候由、御本人様は更なり、御家族方の御喜ひ、如何はかりならんと、御察し申し上ぐる身も、いと〳〵、御嬉しくぞんじ上げ奉り候。かく人々の中より、ぬきんでられ、いと、恐れある身と、成らせらるゝも、御令息様の、御英才によるとは申せ、偏に、あなた様の御敎訓の宜しきに、基つきしに、外無かるへくと、存じ奉り候。かくて、なほ、一しほ御勵み遊ばされ候はゞ、只、朝日の登るが如く、いよ〳〵高く尊く、ならせ給はん事、實に遠からすと、存じ上げ參らせ候。先は、とりあへす、御祝ひまで、めでたくかしこ。

佐藤慈代子

先つ頃は、尋常師範校に、ものせられぬと、承りはへりしが、こたひ新聞紙上にて、始めて承りしに、其御許には、是迄あまたの年、女子敎育につき、かにかくといと細やかに、とりしらへさせられ、且つ一意專心に、深く勵め給ひて、此の程は、其の御經驗より、くさ〳〵のふみまきを編ませ給ひて、女學の海の燈ともなし、昭らけき御代に、尙光を添へ給ひしにより、世の聞ゑめでたく、御ほまれ高く廣

りて、途に去る日、さるやんごとなき御邊より、賞與を賜はり、其上高等師範の教師に、ものせられ給へりとかや、いと〳〵嬉しうめでたききはみになん。されは、これも一向に、御心つかひ給ひし多年の功績と、ほき奉りて、故郷に居ますかぞいろのぬしの、聞かせ給はゞ、さぞな悦び給ふらんと、押し計られて、よその袂にも、悦の餘る心地せられ侍りぬ。先は取り散へず、ことほきの片はしのみ、聞ゐ上けさするになん。あなかしこ。

塙　直　子

見渡す限り、野も山も、いつしかに緑葉の陰深く、朝風も身に涼しくて、若鮎つるへき此頃に、其御許には、益すこやかに在ますとかや。いと〳〵めてたく、ことほき侍るになむ。さて、今朝しも、官報にて承れば、其御許には、こたび舍監に任ぜられ、且つ従六位に進ませ給ひぬとよ。幾度も繰り返す、青柳の糸の、いと〳〵めてたき限になん。こを聞し召すかぞいろのきみの御よろこび、いかゞはなのめならんと、おしはかり奉りぬ。これ、もと其御許の、幾多の年月いそしみ給ひしいさをの、顯はれて、今日明らけき御代に、みほまれを輝し給ふも、獨みやかたの光榮のみならず、我里の榮譽にこそあを今度のみ勤は、もともかゝはりの大にして、其御許の御心がけにて、貴校の職響にさはるべければ、よく〳〵御心つけさせ給ひて、教へ子たちをはぐゝみ給ひねかし。かゝる事は、拙き賤が詞をまたでも、賢しきぬしの、とくに知ろし召されんを、心隔てぬなかさて、思はず、なめの詞、聞ゐあけて煩はし侍る瑕、みゆるして給ひよ。右取り敢へず、ほきことまで、かくなん。あなかしこ。

田　中　廣　子

人は名譽を、獸は皮をと、昔の人の言の葉に、もれ給はぬ、みいさほの高く、かんばしきは君が御名にこそ。必ず朝日と共に、長く此世にかゞやきぬらむ、御奉職以來、去にし年も御位高うならせ給ひて、まだ幾程もあらぬに、またこたび重れての御昇進、いみじき御ほまれ、いと〳〵目出たき限りにこそ。されば、御自らは申すに及ばず、御兩親、扨は御ゆかりに至るまで、御よろこびの程、さこそと推し參らするになむ。げにうれしさも、うれしき極みにこそ。さて、此の品麁末には侍れど、御祝ひのしるしまでに、進じ奉るになむ。けふは、自らさぶらひて、よろづ御祝詞聞ゐ上ぐべきなれど、やむごとなき事の侍りて、得參られば、拙き文もて、かくは聞ゐ上ぐるになむ。近き内に、必ず伺ひ奉らむ程に、なめけの瑕は、みゆるし給ひてよ。

山　内　萬　子

かむはしき御噂、承り候ひぬ、貴姉様事は、去年の春、官命に依りて、女子教育上の任務をおびて、海外遠く、各國へ、御遊學なされ、女子に關する、事業の研究を了へさせられ昨冬目出度御歸國の由、其ののちは、高等師範學校の女子部を、御教導なされ、實地御施しの由、付ては、御精勉の響れたかく、男子も及ばぬ位置におはしますよし、なほ承れば、此の程、亦、御昇級の由、殊に女子の身の、未だ壯年に達せずして、此の如く實驗を重ねられ、其大成を奏するに至りては、御目出たき事限りなう幾久しく、御祝ひ申し上げ候。此の品はばづかしきものながら、御祝のしるしまでに進上致し候間、何卒御受納下されたく何れ後より自身相伺ふべく候へども先は拙なき筆にてかくなむ。かしこ。

佐久間　八重子

春の名残の若葉も、やう／＼に緑濃く。葉がくれの梅の實も、既や、黄ばみそめて、いとなかしきに、居るは、なか／＼に、いみじうなりもてゆけるこそ、うたてけれ。かゝるに君、御恙もなう、平らかに、渡らせらるゝとや。こよなう、嬉しうなむ。其後は、とかくうしまぎれ侍りて、久しうおとつれ聞えさせず、侍りしに、きのふとある新聞の叙任欄を、見侍りしに、御もとには、這回、正七位の敎諭に、進ませられしよし承りて、とびたつごとく、みづからが、位山にのぼり、月の桂を、手折りしにも、彌まして、こよなう嬉しく、ことほぎたてまつるになむ。さるにても、かく、官位を進ませたまひしも、唯それ偶然のことにはなく、進ませらるべき道あればなり。今小兒等のもてはやす、梅の實も、昔ては、寒風霜雪をへて、色香よき花を開き、めでたき實を結びしがごとく、御もとの、かく位山に踏み登らせたまひしも、生れ得たまひし、才智のたちこえられしに、よるとはいへ、學びの窓の功は、富士の嶺よりも高く、御行ひの嬉しきは、高砂の松の操も、唯ならぬに、よることは、言ふも更なり。常々務めないそしみて、百の辛苦を嘗めたまひしによるならむ、學淺く、才拙き、妾の、かくまなすは、嗚呼のきたながら、「驕りは天下の凶德、」又「のりゐても心ゆるすな、」など、古の聖もいましめ給ひたれば、こたびの譽をたのみて、心の駒の手綱をゆるめらるゝことあらむには、内は、今の聖旨に恥ぢ、外は世の識者の爲めに論はれなむにと、狹き心に思ひ出づれば、猶、猶、心の玉をすり研き、譽れの光りを、久方の雲井の上にまでも、打ちかゞやかし、いよ／＼高き名をあげたまはん事を、ひたぶるに、ねぎたてまつるになむ。あなかしこ。

三谷きみ子

朝夕の風なつかしうなり侍りぬるを、君にはいかにわたらせ給ふらん。久しうとたゐ參らせし罪は、なきにゆるさせ給ひてよ。さて、近頃承り侍りぬれば、夫の君には、こたびやんごとなき何このつかさに任ぜられ、御位さへ進ませ給ひぬるよし、まことにいかばかりの御よろこびにか、わきて御齡積らせ給ひし御父母の君の御よろこびは、たとへつべうもおはしまさじと、おのれまで嬉しさのあまり、神の御前に御酒さゝげなどし侍るになむ。かくてこそ、君のかねて望ませ給ひし、厚きあたりの御交りも、思ひのまゝなるべけれ。まことにめでたしといふも、中々になん。あなかしこ。

福原董子

なめくも、玉づさの使して、せうそこ文もて傳へ聞ゆ。うけたまはり侍れば、伯父君には、こたび、勳功の御賞を以て、かしこきあたりより、爵をさへ賜はり、そが上、少將に御昇官あらせられ給ひし由、いと／＼芽出たくぞんじ奉る。御家の方々にもさこそ、御心たらひにおぼすべからめ。こなた父母を始め、妾に至るまで、うれしさ譬ふるにものなく、こよなくよろこび合ひ侍るになん。君の御爲に、將た、國の爲に、何くれと、軍事に、御熱心なる君なれば、さもあるべき御事と、とり／＼語らひ侍り。父はいづれ、兩三日の休暇の中に、さぶらひて、よろづことほぐべけれど、先づとりあへず、つたなきふんでもて、かく祝ひきこゆるになん。あなかしこ。

山崎しつ子

けさもてつたへたる、新聞にて見侍りしに、こたび父君には、御位

階すゝめさせたまひぬとか、常々の御勞のほどいちしるく、いともしくめでたくことほききこえまつりぬ。こなたちゝはゝとも、このほどは、旅にあれば、なめげには侍れど、とりあへず、わらはより、よろこびきこえまつるになむ。父君へも、よきにとり申し給ひてよかし、あなかしこ。

中田豐子

此度、御父の大人、御つかさ位、昇らせ給ひたるよし、御文して知らせ給び、いとめでたき御事の限りになん。御父の大人を始め、御貴方の御悦ひも、如何ばかりにおはしますらんと、推しはかり聞ゆるだに、いみじううれしく侍れば、よにためしなき御よろこびなんかし、さていかさまに、よことを申し聞ゆべきたゞひたすらふしてはいはひ、おきてはことほぎ侍るなり。

錦織さち子

あくがれにし野山の花も、いつしかちり果てゝ、今日しも涼しき緑の葉風の、傳へもて來し音づれ、嬉しさは袂にも胸にもつみ餘りてなん。御家尊の君、かれ〳〵御つかさのため、いみじう御心注がせられひたぶるに國また世の益に、まごゝろ盡し給へるよし、おぼろけならず承り侍りしが、げにあまた年月の御こゝろつくしの、今日かくあらはれけん、いとも〳〵美はしく、御位進ませ給ひつと、妾だにかくばかりたのしきを、まして君々の御こゝろ、いかばかりにかと、まのあたり見奉る心地して、いとゞ御床しくなん侍る。こは、いと御はづかしき品には侍れど、末廣一箱、いや末久しく榮えさせらるゝやうにとていさゝか御祝のしるしに、御目にかけ參らす、いかであまりのあやしさを、御笑ひ給ひぞ、いづれ近き内に、まゐのぼりて、よろづ御祝ことききこゆべくなん。あなかしこ。

小松靜子

わざと一筆申進め候、時分ながら、若葉のかげ、日に〳〵濃やかに相成申候處、御あたりいやましのどやかに渡せられ候御事、いと〳〵目出たくぞんじ上げ候、扨て承り候へば、御父君樣には、かれ〳〵御心を國家の爲めに註がせられ候ひし甲斐に、此度は天晴れ御昇級遊ばされしとの御事、皆々樣の御よろこびは、げにいかばかりかととり〳〵に御噂のみいたしをり候、こゝいさるもしき品には候へどむばかりの御祝までにも、鰹節小々、御目にかけ候まゝ、御受納下されたく候、いつれ今宵あたり參上いたし、山々御祝詞聞え上ぐべく、先づは拙き、筆もて鳥渡御祝ひまでかしこ。

泉さい子

承り候へは、御あるしの君には、こたひ一增の、御昇進、被遊候由、日比の御精勤あやまたず、おごそかなる御しるしさへ、かしこきあたより御下げわたされ候よし、御兩親さま始め御前樣にも、こよなき御悅ひのほどおしはかられ、御したしきはしにつらなる、妾までも、何となくかたはし廣く、心ほこりかに人に語らひまゐらせ候。然とも重き御勤は、一方ならぬやましきこともはべるとかや、承りはべれば、此後とても御前樣、一しほ、御心添られ、ねもころにかしつき、御つかへ被遊、猶、一增の御名譽あらんことを、ねがふになん、御仰にしたがひ、明朝は一子菜を、ともひ、御祝ひの席につらなり、御名譽に、あやかり度、とりあへず、御祝ひまでかくなんあなかしこ。

北島功子

此度御良人樣には、夙に公事に務めはけませ給ひし御功積の現はれさせられ、かしこくもいみじき御あたりより、御官位共に御昇進の御沙汰ゝらせられ候ひし由、目出度しともめてたしや、上なき御名譽の御事となん千代かけて御壽きたてまつり候。御良人樣には申すもおろか、御大人樣御はじめ御一統樣方の御面目の程も、今日よりはいよ〳〵はればれしく嘸々御滿悅の御事と陰ながら推し上たてまつり候、早速まかり候ひて御祝詞申上ろ筈の處一兩日前よりいさゝかの恙にて、何分にも起ちかたく禮なき業ながら、先はとりあへず文して悦祝詞申上候就ては此品甚だ粗末ながらいさゝか御よろこびの印まで、御覧に入れまゐらせ候、不叶御風味にもあづからむには此上なき幸になんあなかしこ。

佐々有鄰子

位山のほるはかたきわざなるに、教師の君は雪にみがき螢につとめし積年の學業大にすゝみたまふものから、此度の除月に、久方の雲のかけはしいや高くのぼりまして、大學校の教授になりたまへり、あなめでたき官なるかも。あなたかき位なるかな。妾が身もたなしらず雀躍して、祝の文奉るになんかしこ。

●女鑑歌文月並兼題

七月五日　歌 夏泉　文 玉と瓦と　六月廿五日〆切

七月廿日　歌 新田義貞公　文 友人の病氣を其近親に報ずる文　七月十日〆切

八月五日　歌 百合花　文 瀧の書を見て　七月廿五日〆切

八月廿日　歌 朋友　文 山遊び　八月十日〆切

歌文原稿は必〆切期日迄に本社に到着する樣送らるべし。遲れたるはすべて沒書とす。

◎宛名は國光社女鑑編輯部とせらるべし。

◎投稿歌文中より天地人の三才を撰り、天に該號の女鑑三部。地に仝二部。人に仝一部を贈呈す。又他に秀逸を撰む。

生田目經德編

標注 雅文消息集 全

●菊版美本
●全一冊
●定價金廿五錢
●郵稅四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艷麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きものゝ躰大にとゝのひ雅馴にして艷麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさば益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社

三輪田眞佐子著

第七版

女子之本分 全

定價 金二十五錢

郵税 金六錢

本邦固有の道徳に基きて、我か國の婦女が盡すべき本分を明にせるもの、之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす。本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは、世間既に定評あり。敢て贅せず。再版三版忽ちにして賣り盡し、四版五版猶需要を充すに足らず、從て出れば從て盡き、諸嬢が一日千秋を以て待ち給ひし第七版は今や漸く其成を告ぐ。購求せんとする諸子は、此の際至急申込まるべし。所載極めて廣大、試に其の目次を示さむ、

目次

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社

（電話本局八八）

杉谷正隆編

修身百首

全一冊　定價金二十錢　郵稅金四錢

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

孝明天皇御遺德

先帝御製（東久世伯染筆）挿入　全一冊定價金二十五錢　郵税金四錢

恭て按ずるに先朝　孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**事蹟**尙湮晦に屬し**聖德**未だ外に露れず是れ頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及び先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歷談**に依り以て汎く**逸事遺聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず

今此書の一班を示せむ先づ**御一代**の章を掲げ編年體を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し**聰明**の章に於て　先皇の英明絕倫なるを概說し**夙成**の章は御幼時の御言行を示し**慷慨**の上編は醜夷猖獗の事、其下編は皇權回復の事に痛く　叡慮を惱されたる事蹟を敍し**孤憤**の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す**撫御**は識見卓出の實際を明にし**豁達**は言路洞開の聖德を輝かし**忍耐**は襟裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し**仁愛**は惻隱仁恕の御心甚た厚かりしを明にす、而して前數章に配置する能はさりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て　先帝の聖德を頌し奉る

東京京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　國光社

稟告

一本社出版物御購求の方は代價は必ず前金御拂込可被下候領金の順序に依り送本可致候

一郵便爲替にて御送金の節は拂渡局は東京新富町郵便取扱所にして受取人は東京々橋區築地二丁目國光社宛に御取組可被下候又通運會社早達便にて御送金の節は府下配達賃共必ず御拂濟可被下候

一郵便切手を以て代金に換用せらるゝ時は一割増に申受候

一本社へ御問合せの節は必返信料御添附可被下候然らざれば返信不仕候

一書籍雜誌御買上の方に對し別に代金受取證を差出し不申候間御注文品到着を以て入金の證と御認め被下度若領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附可被下候

一本社に御文通相成方は住處姓名等可成明瞭に御認め被下度候然らざれば往々行違を生じ相互の不便免れ難く候

一未納税の來書は一切受取不申候

發行所
東京京橋區築地二丁目二十一番地
（電話番號本局八八）
國光社

第四卷 第七

國學院雜誌

五月廿日發行

定價一冊金十五錢

賛成員募集

○賛成員には國史國文上の質問に應じ精確なる解義を與ふ○歌文を添削し撰拔の歌文を本誌に掲載す○○雜誌を進呈す

目次

賛成員待遇規則

入用の者は郵券二錢を添へて申込まるべし

東京市麹町區飯田町五丁目
國學院

○女禮教授　生徒募集○

男女の禮節の事はしも靈ちはふ神代より有て、つがの木のいや繼々に狛野の菰の成調ひ來れるなりけり　薪てる鎌倉將軍の時代に及びて物はさに公の禮旗海はかに兵の禮を設けられて、王匣ふたつの禮有に至れり　かくて後瀬の山の是より後、兵の禮は秋の夜の月まさやかに澄みまさり　公の禮は春の夜の月朧げになりにけり　さゝら荻足利將軍の時に至りて、物のふの小笠原の家に弓馬の業を司とらしめ、御食向ふ伊勢が家に禮節の事を預からしめたりき

今吾　有住教場にて教へつる禮節は、いは橋の間近き世まで正しく傳はりこし伊勢が家傳を源として、股海松のまたたげく世人の流くみたる水鳥の傳へなる小笠原流をもとゞめて、異管よしそが上に秋の野の千種に故事草を採取て、群肝の心を禮の事に盡されたし松岡の某が千歳にもと殘されたる緑葉の色をかへず、又上古の直き手振の一節をも玉蔓つら〳〵に引て、今の大御代に用ゐらるべきを撰びて教へ授くるになん

弓さ馬さの事取て名細しき小笠原某が傳へたるは弓馬の禮にして押並ての禮節の數へにあらず又小笠原流さ世にひ習ひたるは今もなほ小笠原家にて水島流さいひたる物にして是も正しき物にあらざるなり

授業規則

旨眼　普通禮式　小笠原流　伊勢流

授業課目　普通科　前期一ヶ年　起居進退　物品取扱　花結　包形
　　　　　　　　　後期一ヶ年　配膳酌酌　諸祝儀式　花結　包形
同　別科　國文講義　和歌　茶道　活花

授業時間　普通科　毎日曜日午前八時より午後五時
　　　　　特別科　毎土曜日午前九時より午后五時

授業料　普通科前期一ヶ月　金五拾錢
　　　　後期一ヶ月　金壹圓
　　　　別科一ヶ月　金壹圓
但本科兼習、又三課目の内一二課を分て學習の時は、其課目に付て、減額す

東脩料　金五拾錢

特別科　前後期規定の授業受けたき者の爲に設く
毎月十回（日曜日の他に五回を増）　授業　期限を定めず

手藝科　婚禮式結納より諸祝儀式用裝飾、四季進物包形諸祝儀膳部の式等を教授す
毎月六回教授　期限二ヶ年

授業料　特別科一ヶ月　金壹圓五拾錢　束脩金壹圓
　　　　手藝科一ヶ月　金五圓　束脩金二圓

○是二科は今回更に設けたる物にして、手藝科は世間の禮節家の未だ學び得ざる所なり。右の規定により契約の上入場を許す
出張教授　毎日曜日のほか教授の依頼に應ず

麻布區永坂町壹番地
有住教場
（教頭）　有住常子

明治三十一年

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす會員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十一年六月十九日印刷
同　年六月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衞

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木艮雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號本局八八）國光社